

梅棹忠夫著

知的生産の技術



岩波新書

F93

知的生産の技術

梅棹忠夫著

岩波新書



F
93



9784004150930



1920230009606

ISBN978-4-00-415093-0

C0230 ¥960E

定価(本体960円+税)



学校では知識は教えるけれど知識の獲得のしかたはあまり教えてくれない。メモのとり方、カードの利用法、原稿の書き方など基本的技術の訓練不足が研究能力の低下をもたらすと考える著者は、長年にわたる模索の体験と共同討論の中から確信をえて、創造的な知的生産を行なうための実践的技術についての提案を試みる。

岩波新書から

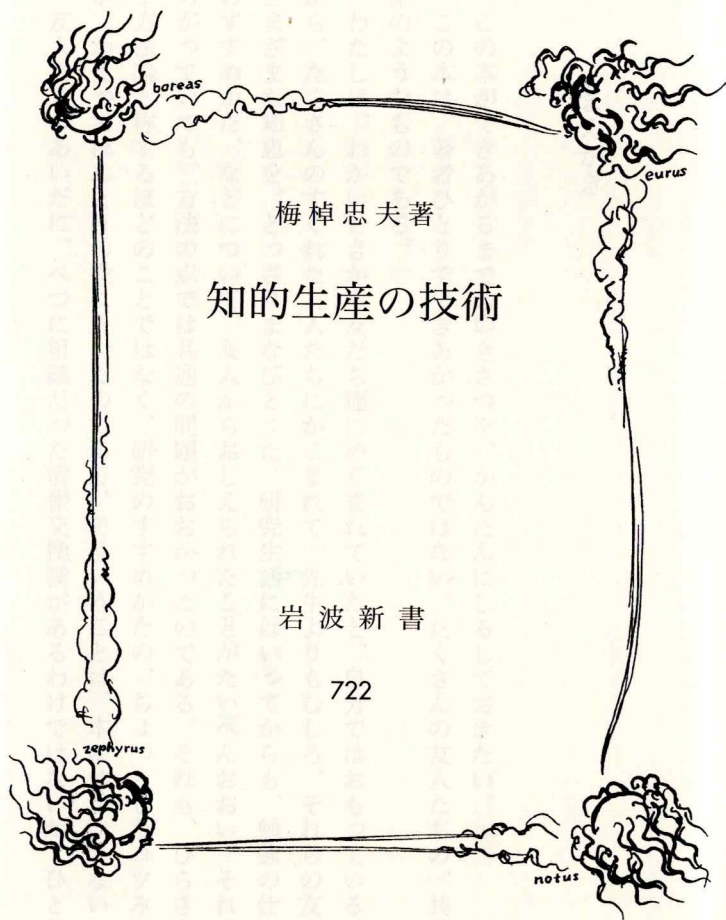
モゴール族探検記 梅棹忠夫著 F 60

文章の書き方 辰濃和男著 328

論文の書き方 清水幾太郎著 F 92

なつかしい時間 長田弘著 1414

仕事道楽 新版 スタジオジブリの現場 鈴木敏夫著



梅棹忠夫著

知的生産の技術

岩波新書

722

この本ができあがるまでのいきさつを、かんたんにしるしておきたい。
この本は、著者ひとりできあがったものではない。たくさんの友人たちの、共同作業の結果のようなものである。

まえがき

わたしは、わかいときから友だち運にめぐまれていたと、自分ではおもっている。学生時代から、たくさんのすぐれた友人たちにかこまれて、先生よりもむしろ、それらの友人たちから、さまざまな知恵を、どっさりまなびとった。研究生活にはいつてからも、勉強の仕かた、研究のすすめかた、などについて、友人からおしえられたことがたいへんおおい。それぞれ専門はちがっていても、方法の点では共通の問題がおおかつたのである。それも、ひらきなおって科学方法論と称するほどのことではなく、研究のすすめかたの、ちよつとしたコツみたいなものが、かえってほんとうの役にたつたのである。そういうことは、本にはかいてないものだ。

友人たちのあいだに、べつに組織だった情報交換網があるわけではないが、ひとりが、なに

著者 山田 幸夫
編集 山田 幸夫

書 種 文 学

222

かあたらしい技術を案出すると、それがほかの仲間にもすぐたわるような仕くみが、いつのまにかできあがつて、いまにつづいている。だんだんとあたらしい技法も開発されて、つけかわり、また、ふるい技術は経験によつて改良をうける。いまでは、これらの友人のあいだでの共有財産は、質的にも量的にも、かなりのものになっている。

その成果の一部を、あたらしい友人にはなしてみると、たいへん興味をしめすひとがおおい。具体的な技法についても、しばしばおしえてくれといわれる。そこで、そのような主題で、なにか執筆してみようかとおもいたつたのは、一九六四年の秋のころだったと記憶する。

岩波書店の編集部のひとにあつて、この話をしているうちに、これはなにも「研究」にかぎつた問題ではなく、じつは、一般の「勉強」の方法にもつながることではないか、ということになった。なるほど、研究といつても、それをその構成要素となつてゐる具体的な作業にまで分解してみると、けつきよくは、よむ、かく、かんがえる、などの動作に帰着するのであつて、一般の「勉強」となにもかわらない。

そこで、予想される読者としては、研究者だけではなく、これから学問をやろうという学生諸君をもふくめ、また、ひろく一般に各種の知的活動を仕事にしている人たちをも対象に想定して、わたしたちの経験を、エッセイふうにかいてみようとおもいたつた。まったく前例もな

いことなので、できあがつた技術を解説するというよりは、いままでのなりゆきを中心にのべて、この種の論議におおに関心をもつてもらおう、というつもりだった。

あくる年、一九六五年の四月から、岩波書店で発行している雑誌『図書』に、「知的生産の技術について」という題で、連載記事をかきはじめた。はじめは、ほんの三、四回でおわるつもりであつた。かきはじめてみると、いろいろな問題がでてきて、これはとても、そんなにかんたんにカタがつく話ではない、ということが、はつきりしてきた。そこで、腰をすえて、一年くらいは連載をつづけるつもりになつて、仕事をつづけた。ところがその後、本業のほうがいそがしくなつて、かぎつづけることがむづかしくなり、けつきよく、このときの連載は第六回までで、しりぎれトンボにおわつた。

連載中は、たくさん読者から手紙をもらった。書店のほうに投書がきたのもおおく、直接にわたしあてのもたくさんあつた。なかには、わざわざ研究室までたずねてこられたひと、なんにんもあつた。連載記事に対する共感や激励のことばがおおかつたが、質問や、あたらしい提案もすくなくなつた。自分の設計したカードなどをおくつてくださるひとあつた。わたしは、ひじょうにたくさんひとが、この種の問題につよい関心をもつておられることをしつて、こういうものをかきはじめたかいがあつた、とおもつた。

連載がおわってからも、投書はつづいた。連載の第一回分が、高等学校の国語の教科書に収録された、というような事情も手つづいたのかもしれないが、その後三年くらいのあいだ、投書や、問いあわせがつづいた。こういう経験は、まったくはじめてであった。

岩波書店のひとにすすめられて、とうとう続編をかくことになった。一九六八年の一〇月から、やはり『図書』に、「続・知的生産の技術について」という題で連載したのが、それである。こんどは五回つづけた。まだいくつか、かきたい項目もあったが、まとめて新書にしようという話があつたので、いちおうそれでうちきつた。前後一回にわたつた連載記事をもとにして、それに手をいれ、さらにいくつかの章をかきたして、できあがつたのがこの本である。

最初の連載をはじめるときに、題名に苦労した。かきたいことが頭のなかに、もやもやとあるのだが、それを適切に表現することばが、なかなかみつからなかった。編集のひとつ、知恵をしぼりあつて、いろいろな題をかんがえた。「手紙・ノート・日記」などという平凡なものから、「わたしの勉強設計」とか、「事務の演出」とか、「神経生活」などという珍案までだが、どれも満足できなかった。そのころ、湯川秀樹先生が、わたしのプランのことをつたえきかれて、それはやはり一種の「技術」の問題ではないか、というヒントをくださった。たしかにいわれてみると、これは「技術」だ。しかし、なんの技術だろうか。「勉強の技術」というので

は、すこしものたりない。もつと創造的な知的活動の技術だというつもりで、「知的生産の技術」ということにしたのである。

もつともわたしは、いわゆる「ハウ・ツーもの」をかくつもりは、まったくなかった。わたしは、こういう問題についての関心をかきたて、刺激を提供することができれば、それでよいので、技術の解説書や教科書をつくらうという気は、はじめからなかった。「知的生産の技術」書ではなく、エッセイだという意味で、「……について」としたのであつた。

あとの連載のときも、たくさん読者の手紙をいただいた。かなりのひとが、技法の細部について、つよい関心を示しておられるようなので、そのことをかんがえにいて、こんど本にまとめるにあたっては、技法の解説の要素をいくらか補強した。しかし、わたしの役わりは、やはりどこまでも、話題の提供者というにとどまるもので、技術の体系的な解説者ではありえない。知的生産の技術の開発も、その体系化も、これからの話である。今後、たくさんの人たちの手によって、知的生産のさまざまな技術が開発され、その体系化もすすめられるようになるだろう。その日を期待している。

本にまとめて世におくりだすにあたって、『図書』連載中に手紙をくださったたくさん読者のみなさんに、あらためてお礼をもうしあげたい。いろいろなアイデアをおしえてくれた

友人たち、とくに、川喜田二郎、藤岡喜愛、和崎洋一、加藤秀俊、樋口謹一、樋口敬二そのほかの諸兄の友情に、あつく感謝する。さきへのべたとおり、題名については、湯川秀樹先生から貴重なヒントをいただいた。知的生産の技術についてかいていくせに、いつこうにすぐれた技術者ぶりを発揮しない著者が、とうとう本ができるところまでたどりつくことができたのは、岩波書店編集部のみなさん、とくに田村義也、浅見いく子、小川寿夫の諸氏の、しんぼうづよい応援のおかげである。しるして、感謝の意をあらわしたい。

一九六九年六月

梅棹忠夫

目次

まえがき

はじめに 1

学校はおしえすぎる／やりかたはおしえない／技術の不足と研究能力／技術ぎらい／知的生産とは／情報産業の時代／生活の技術として／現代人の実践的素養／物質的条件の変化／個人の知的武装／この本のねがい

1 発見の手帳 23

ダヴィンチの手帳／わかき「天才」たち／発見の手帳／文章でかく／有効な素材蓄積法／発見をとらえる／手

帳の構造／一ページ一項目／索引をつくる

2 ノートからカードへ 37

直輸入の伝統／天皇のノート／ノートの進化／ノートからカードへ／野帳／野外調査法とカード／現地でカードをつくる／共同研究／京大型カード

3 カードとそのつかいかた 55

カードのおおきさ／紙質と印刷／もってあるく／わすれるためにかく／一枚一項目／分類が目的ではない／歴史の現在化／有限への恐怖／カードへの批判

4 きりぬぎと規格化 73

はじめてのきりぬぎ／スクラップ・ブック／台紙にはる／仕わけ棚からオープン・ファイルへ／資料を規格化する／規格品ざらい

5 整理と事務 89

本居宣長の話／整理と整頓／おき場所の体系化／整理法の模索史／パーキンス先生のこと／垂直式ファイリング／分類項目をどうするか／キャビネット・ファイル／家庭の事務革命／空間の配置をきめる／事務近代化と機械化／秩序としづけさ

6 読書 109

よむ技術／よむこととたべること／本ずきのよみべた／「よんだ」と「みた」／確認記録と読書カード／読書の履歴書／一気によむ／傍線をひく／読書ノート／本は二どよむ／本は二重によむ／創造的読書／引用について

7	ペンからタイプライターへ	133
---	--------------	-----

日本語を「かく」／筆墨評論／鉛筆から万年筆へ／かき
文字の美学と倫理学／タイプライターのつかいはじめ／
手がきをはなれて／ローマ字論の伝統／ことばえらびと
わかちがき／文字革命のころみ／きえた新字論／ロー
マ字からカナモジへ／カナモジ論の系譜／カナモジ・タ
イプライター／カナモジへの抵抗／ひらかなだけでかく
／ひらかなタイプライター／改良すべき問題点

8	手紙	161
---	----	-----

情報交換の技術／手紙形式の収れんと放散／形式の崩壊
／手紙ぎらい／形式再建のために／あたらしい技法の開
発／タイプライターがきの手紙／まちがいなくきれいに
／手紙のコピー／住所録は成長する／アドレス・カード

9	日記と記録	179
---	-------	-----

自分という他人との文通／魂の記録と経験の記録／自分
のための業務報告／バラ紙にかく日記／日記をかんがえ
なおす／日記と記録のあいだ／記憶せずに記録する／メ
モをとるしつけ／野帳の日常化／カードにかく日記／個
人文書館

10	原稿	195
----	----	-----

他人のためにかく／訓練の欠如／印刷工事の設計図／出
版・印刷関係者の責任／ルールは確立しているか／原稿
は原稿用紙にかく／原稿用紙／原稿から印刷へ／わかち
がきと原稿／印刷技術をかえる／清書はいらない／かな
らずコピーする

11	文章	215
----	----	-----

失文症／行動家の文章ぎらい／才能より訓練／かんがえ
をまとめる／こざね法／ばらばらの資料をつなぐ／発想

の体系的技術／まずわかりやすく／用字・用語の常識／
日本語は非論理的か／文章技術の両極／国語教育の問題

おわりに

技術の体系化をめざして／情報時代のあたらしい教育

235

はじめに

学校はおし
えすぎる

ある芸ごとの名人の言だということだが、つぎのようなことをきいたことがある。「芸ごとのコツというものは、師匠からおしえてもらうものではない。ぬすむものだ」というのである。おしえる側よりもならう側に、それだけの積極的意欲がなくては、なにごとにも上達するものではない、という意味であろう。

芸ごとと学問とは、事情のちがうところもあるが、まなぶ側の積極的意欲が根本だという点では、まったくおなじだと、わたしはかんがえている。うけ身では学問はできない。学問は自分がするものであつて、だれかにおしえてもらうものではない。

そういうことをかんがえると、いまの学校という制度は、学問や芸ごとをまなぶには、かならずしも適当な施設とはいにくい。今日、学校においては、先生がおしえすぎるのである。

親切に、あまりにも親切に、なんでもかでも、おしえてしまうのである。そこで学生は、おしえてもらうことになれて、みずからまなぶことをしらない、ということになってしまう。

はじめに

もし学校において、教師はできるだけおしえまいとし、学生はなんとかして教師から知恵をうばいとつてやろうとつとめる、そういうきびしい対立と抗争の關係が成立するならば、学校というものの教育的効果は、いまの何層倍かにもものぼるのではないかと、わたしは想像している。いまの学校のやりかたが、まったく無意味だともおもわれないが、学問や芸術などの創造的な活動力をやしなうには、たしかにあまりで、きのよい制度とはおもわれない。

この本で、わたしがこうとしていることは、要するに、いかによみ、いかにかき、いかにかんがえるか、というようなことである。それは、一種の「勉強の仕かた」に類することかもしれない。じつさい、この本の題名をきめるときにも、「勉強法」という語をいれてはどうかという案を、いくども検討してみたくらいである。しかし、「勉強」というと、やつぱり学校との關係においてかんがえるのがふつうだろう。「勉強法」というと、学校でよい成績をとるためのテクニクだ、というふうにうけとられるおそれがある。今日の学校において、よい成績をとるためには、ひじょうに特殊なテクニクを必要とする。この本は、はじめから、そういうことをかくのを目的にしていけないので、誤解をさけるために、「勉強法」という語を敬遠したのである。

学校では、ものごとをおしえすぎるといった。それとまったく矛盾するようだが、やりかたはおしえない

る。ある点では、ほんとうにおしえてもらいたいことを、ちつともおしえてくれないのである。

どういうことをおしえすぎて、どういう点をおしえおしみるか。かんたんにいえば、知識はおしえるけれど、知識の獲得の仕かたは、あまりおしえてくれないのである。そのことは、中学・高校ばかりか、さんねんながら学問の府であるところの大学においても、おなじである。しばしば、「大学は学問をおしえるところではない。学問の仕かたをおしえるところだ」ということがいわれる。しかし、じつさいはやはり、大学においても、学問の方法をおしえるよりも、学問の成果をおしえるほうに熱心である。

学問の方法などというと、すぐに方法論がどうのこうのという話になりやすいが、ここで問題にしようというのは、そんな高尚な、むつかしい話とはちがうのだ。学問をこころざすものなら当然こころえておかねばならぬような、きわめて基礎的な、研究のやりかたのことなのである。研究者としてはごく日常的な問題だが、たとえば、現象を観察し記録するにはどうするのがよいか、あるいは、自分の発想を定着させ展開するにはどういう方法があるか、こういう

ことを、学校ではなかなかおしえてくれないのである。

このことをわたしは、わかい研究者諸君の指導をする立場にたつようになってから、気がついた。大学をでて、あたらしく研究生活にはいつてくる人たちは、学問の方法論については堂々たる議論をぶつことはできて、ごくかんたんな、本のよみかた、原稿のかきかたさえも知らないということが、かならずしもめずらしくないのである。

わたし自身の過去をふりかえってみても、そうである。わたしは永年、学校にはかよったけれど、先生たちは学問の内容をおしえるばかりで、勉強の仕かたという点では、意識的にせよ無意識的にせよ、結果的には意外に秘密主義であつたようにおもふ。たとえば、ノートのとりかたひとつにしても、わたしは、先生から直接おそわつたという記憶がない。文献カードのつくりかたさえも、おしえてくれなかった。みんな、「見よう見まね」でやつてきたのである。

あるいは、それでよかったのかもしれない。おしえてくれないからこそ、学生たちは自発的・積極的に、自分でくふうし、あるいは先生や先輩のやりかたを「ぬすんで」、どうやらきりぬける方法を身につけるようになるのである。学校の先生の秘密主義というのも、遊芸師匠の指南法とおなじで、やはり教育というもののツボをこころえてのことであつたかもしれない。

技術の不足 と研究能力

それで、すべてうまくゆくなら問題はない。ところが、じつさいはそうはゆかないのである。秘密主義のやりかたでは、みんながまんまと秘伝のぬすみどりに成功するとはかぎらないのである。そしてその結果、基礎的素養において欠陥のある研究者が、つぎつぎと出現してくるということになる。知識においては高度なものを身につけていくにせよ、研究の実践面においては、いちじるしく能力がひくい、というような研究者がでてくるのである。

じつは、わかい人たちのことばかり、いつておられないようだ。われわれ中堅どころにいる研究者だって、ほんとうは、おそろしく研究能力がひくいのではないだろうか。それも、頭がわるいとか、なまけものだとかの理由からではなく、もっぱら研究の「やりかた」がまずいために、研究能力がひくい段階にとどまつたままである、ということがあるのではないだろうか。いわば、技術の不足にもとづく研究能力のひくさである。

たとえば、日本の研究者たちは、むかしから原稿の複写をとるということをしない。複写の技術的手段も、ながく開発されることがなかった。アメリカなどでは、論文や著書は、印刷して公表するまえに、原稿の複写というかたちで、それぞれ数人の専門家たちに目をおしてもらう、というのがふつうのやりかたである。そういう原稿が、海をこえてわたしどものところ

までまわつてくる。ところが、こちらはそんなことは、したことがない。印刷され、発表されたものをみているかぎり、形はおなじだが、内容の吟味という点では、あきらかに一段階ちがうのである。これを、技術の不足にもとづく研究能力のひくさといわずして、なんであろうか。また、つぎのようなこともある。研究に資料はつきもので、研究者はさまざまな資料——たいていは紙ぎれに類するものだが——をあつかわなければならない。ところが、そういうものの整理法の研究がすすんでいないために、おおくの研究者は、どうしてよいかわからない。研究室はわけのわからない紙ぎれの山で大混乱ということになる。

そこで、混乱をふせぐために、しばしばとられている方法は、いわば「きりすて法」とでもいうようなやりかたである。つまり、自分の学問的関心を、できるだけせまい分野にとじこめてしまつて、それに直接の關係をもたない事項は、全部きりすててしまうのである。そういうふうには、みずから専門をせまく限定すると、必要な資料はごくすくないものとなる。それ以外の資料は、すべてまるめて紙くずかごにほうりこめばよい。

たしかに、こういうやりかたをすれば、資料を整理する必要はすくなくなつて、研究室も混乱しなですむ。そのかわり、いわゆる専門バカといわれるような、視野のせまい、学問的生産力のとぼしい研究者になりやすい。これは、われわれ研究者が、しらぬまにおちいりやすい

おとし穴で、つねに自戒をおこたつてはならないことだろう。これも、整理の技術がしつかりしておれば、よほどすくえるはずのものである。

技術ぎらい

こういう例のほかにも、やりかたさえうまくやれば、はるかに成果があがるだろうとおもわれることが、すくなくない。ところが、どういうわけか、そのような研究生活における基礎的技術みたいなものは、研究者のあいだでも、意外に論議されることがないのである。ずっと高級な、それぞれの専門領域における特殊技術については、くりかえし議論がおこなわれ、本もたくさんある。ところが、もつとも一般的、研究者ならだれでも身につけていなければならないような、共通の基礎技術みたいなものについては、かえつてだれも関心をはらわないのである。そういうことを主題にした本もない。

なぜこういうことが議論の対象にならないのかというと、おそらくは、それがあんまり日常的で、あたりまえのことだからだろう。たとえば、複写の話とか、資料の整理法とかも、とりたてて「技術」というのもおかしいようなことなのだ。

もうひとつの理由として、わたしは、研究者における技術ぎらい、あるいは技術軽視ということがあるのではないかと想像している。日本だけのことがどうかよくわからないが、すくなくとも日本では、とくに高級知識人のあいだで、かなりそのような傾向がみられるようである。

技術というものは、なんとなく人間性に反したもののようにかんがえられ、あるいはまた、ものごとの本質からはなれたことだとかんがえられているのである。「技術的」ということばは、しばしば、「枝葉末節」とか「表面的・非本質的」という意味をもふくめてもちいられる。

この点については、研究者のなかでも、理科系のひとと文科系のひととは、かなり態度のちがいがみられるようである。技術ぎらいは、やはり文科系のひとの場合におおい。文科系の研究者のなかには、整理ということさえ徹底的に拒否する、という生活態度を堅持しているひともある。

技術ぎらいの高級知識人でも、じつは、個々の研究者についてみれば、技術をもっていないわけではもちろんない。むしろ、なかなか高度の技術を身につけているひとがおおいのである。ただ、そういうものを技術とかんがえることをこのまない、というにすぎない。

技術というものは、原則として没个性的である。だれでもが、順序をふんで練習してゆけば、かならず一定の水準に到達できる、という性質をもっている。それは、客観的かつ普遍的で、公開可能なものである。ところが、それに対して、研究とか勉強とかの精神活動は、しばしばもつとも个性的・個人的なとなみであつて、普遍性がなく、公開不可能なものである、というかんがえかたがあるのである。それは、個性的な個人の精神の、奥ぶかい秘密の聖域でいと

なまれる作業であつて、他人にみせるべきものではない……。

しかし、いろいろしらべてみると、みんなひじょうに個性的とおもっているけれど、精神の奥の院でおこなわれている儀式は、あんがいおなじようなものがおおいのである。おなじようなくふうをして、おなじような失敗をしている。それなら、おもいきつて、そういう話題を公開の場にひっぱりだして、おたがいに情報を交換するようにすれば、進歩もいちじるしいであろう。そういうようにしようではないか、というのが、このような本をかくことの目的なのである。

知的生産とは

いままでずっと、学問や研究のことを中心にして話をすすめてきた。しかし、こんな話はなにも研究者だけにかぎったことではない。多少とも知的生産活動に従事しているひとには、すべて関係のあることである。

ところで、この「知的生産」というのは、どういうことなのだろう。この本では、書名にもその語をつかい、わかりきったことばのようにあつかつてきた。しかし、なんだか耳なれないことばだ、とおもっているひとがおおいのではないかとおもう。それも当然なので、これはわたしのつくったことばである。その意味内容については、いちおうの説明が必要であらう。

ここで知的生産とよんでいるのは、人間の知的活動が、なにかあたらしい情報の生産にむけ

られているような場合である、とかんがえてよいであろう。この場合、情報というのは、なんでもよい。知恵、思想、かんがえ、報道、叙述、そのほか、じゅうぶんひろく解釈しておいてよい。つまり、かんたんにいえば、知的生産というのは、頭をはたらかせて、なにかあたらしいことがら——情報——を、ひとにわかるかたちで提出することなのだ、くらいにかんがえておけばよいだろう。この場合、知的生産という概念は、一方では知的活動以外のものによる生産の概念に対立し、他方では知的な消費という概念に対立するものとなる。

人間の生産活動には、いろいろの種類のものがある。たとえば、肉体労働によつて物質やエネルギーを生産する。ところが、知的活動というものは、もしなにかを生産しているとすれば、それはいつも情報を生産しているのである。その情報が、物質やエネルギーの生産に役だつものであるにせよ、とにかく第一次的に知的活動の結果として生産されるのは、情報である。

ところがいつぼうでは、情報はいつでも知的活動の結果として生産されるとはかぎらない。情報生産のなかにも、さまざまなものがあつて、なかには知的生産とはいえないような情報生産もある。たとえば、ピアノやバイオリンの演奏とか、舞踊の上演とか、おいしい料理をつくるとか、こういうものもいずれも情報生産にはちがいないが、知的情報生産とは区別したほうがよいだろう。いうならば、感覚的あるいは肉体的情報生産とでもいうべきであろうか。

つぎに、知的生産に対立する知的消費とはどういうことか。人間の知的活動には、いろいろのものがあつて、知的活動をしたからといって、かならずしも情報生産をするとはかぎらない。なかには、まったく消費的な性質のものもすくなくない。たとえば、マージャンや将棋をたのしむのは、一種の知的消費である。それらのものは、高度の知的活動をとまなうけれども、それはそれでしまいのもので、なにもあたらしい情報を生産するものではない。また、趣味としての読書というのも、知的消費の一種であつて、そのかぎりではマージャンや将棋とおなじ性質のものである。読書については、いずれあとの章でのべるが、今日おこなわれている読書論のほとんどすべてが、読書の「たのしみ」を中心にして展開しているのは、注目してよいことだとおもう。今日、読書はおもに知的消費としてとらえられているのである。

おことわりしておくが、わたしは、マージャン・将棋・読書のたぐいを、わるいことだといっているのではない。それは、知的消費だといっているのである。知的であれ、それ以外のものであれ、消費はべつにわるいことではない。

情報産業の時代

知的生産とは、知的情報の生産であるといった。既存の、あるいは新規の、さまざまな情報をもとにして、それに、それぞれの人間の知的情報処理能力を作用させて、そこにあたらしい情報をつくりだす作業なのである。それは、単に一定の知識をも

とで、にしたルティーン・ワーク以上のものである。そこには、多少ともつねにあらたなる創造の要素がある。知的生産とは、かんがえることによる生産である。

こういう生産活動を業務とする人たちが、今日ではひじょうにたくさんになってきている。研究者はもちろんのこと、報道関係、出版、教育、設計、経営、一般事務の領域にいたるまで、かんがえることによって生産活動に参加しているひとの数は、おびただしいものである。情報の生産、処理、伝達、変換などの仕事をする産業をすべてまとめて、情報産業とよぶことができるが、その情報産業こそは、工業の時代につづくつぎの時代の、もつとも主要な産業となるだろうと、わたしはかんがえている。そして、その情報産業のなかでは、とくに知的生産による部分が、ひじょうにたいせつであることはいままでもない。

いままで、人間の知的活動は、どちらかといえば、むしろぜいたく物であつた。「ウタ(歌)をつくるよりタ(田)をつくれ」ということわざがあるが、それがしめすように、知的活動よりも、肉体的活動による物資やエネルギーの直接的な生産のほうが、実際問題として重要であつたのだ。そういう時代にあつては、知的活動は、むしろ「歌づくり」のように、一種の消費であつた。読書が、教養であり娯楽であつたというのも、もつともなことである。

現代では、その事情がかわりつつあるのだ。知的活動が、いちじるしく生産的な意味をもち

つつあるのが現代なのである。知的生産ということばは、いささか耳なれないことばだが、これもそのような時代のうごきを反映しようとしたものとして、うけとつていただきたい。また、人間の知的活動を、教養としてではなく、積極的な社会参加の仕かたとしてとらえようというところに、この「知的生産の技術」というかんがえかたの意味もあるのではないだろうか。

生活の技術として
このような意味での知的生産であるならば、それは、現代にいきる人間すべての問題ではないか。研究者、学生、文筆業者、あるいはひろく情報産業従事者といつてもよいが、そういう人たちの範囲をこえて、すべての人間が、その日常生活において、知的生産活動を、たえずおこなわなければならないような社会に、われわれの社会はな

りつつあるのである。

社会には、大量の情報があふれている。社会はまた、すべての人間が情報の生産者であることを期待し、それを前提として組みたてられてゆく。人びとは、情報をえて、整理し、かんがえ、結論をだし、他の個人にそれを伝達し、行動する。それは、程度の差こそあれ、みんながやらなければならないことだ。今日においては、家庭の主婦さえもが、日常の生活のなかで、知的生産をたえずおこなわなければならないのである。それでなければ、家庭の経営も、子どもの教育もできないのである。

そこで、知的生産の「技術」が重要になってくる。はじめは、研究の技術というところから話を始めたが、技術が必要なのは研究だけではない。一般市民の日常生活においても、「知的生産の技術」の重要性が、しだいに増大しつつあるようにおもわれる。

資料をさがす。本をよむ。整理をする。ファイルをつくる。かんがえる。発想を定着させる。それを発展させる。記録をつける。報告をかく。これらの知的作業は、むかしなら、ほんの少数の、学者か文筆業者の仕事だった。いまでは、だれでもが、そういう仕事をしなければならぬ機会を無数にもっている。生活の技術として、知的生産の技術をかんがえなければならぬ理由が、このへんにあるのである。

さきほど、家庭の主婦のことにふれたが、むかしは家庭のなかでは、文字シンボルをあつかうことは、ごくすくなかった。今日では、家庭のなかにも書類がはんらんしはじめている。書類整理の基礎的技術を身につけていない女性は、家政をとることさえ、むつかしくなってきたのである。

じつは、この本で紹介する知的生産の技術の具体的な実例のいくつかは、家庭においてもそのまま適用できるものである。おそらくは、家庭における知的生産の技術論を発展させて、家政学の重要な一分野として確立させなければならないのであろう。情報産業の時代においては、

家庭もまたそのワクのそとにすることはできない。家庭における知的生産の技術については、いくらかかんがえていることもあるが、またべつの機会もあるだろうから、ここでは問題を指摘するだけにおこう。

現代人の実践的素養

知的生産にたずさわる人たちの、社会的なありかたがかわってきたと同時に、知的生産に必要な技術のありかたもまた、時代とともに、おおきくかわってきたようである。いわば、知識人として身につけていなければならない実践的素養とでもいうべきものの内容が、ずいぶんかわってきたのである。

むかしは——江戸時代から明治のころは——漢文が自由によめなければ、知識人としてはもちろん落第であつた。今日においては、漢文がよめるといふ能力は、まったく問題にもならない。むかしは、毛筆でもって文字がかかるということは、必要最低限の技能であつただろう。いまではそれは、一種のぜいたくな趣味的技能にすぎない。

なにがいったい、現代の知識人としての必要最小限の技能であるか。そういうことをかんがえてみようというのも、この本のひとつのねらいである。専門はなんであれ、現代において知的生産をおこなう人間として、どれだけの実践的素養が必要であるのか。もつとも、すでにのべたように、知的生産の技術は、一部の知識人のものではなく、今日においては、だれにも必

要なものである。知識人という限定もはずして、現代人としての実践的素養の問題といいなおすべきであろう。

くりかえしているが、今日は情報の時代である。社会としても、この情報の洪水にどう対処するかということについて、さまざまな対策がかんがえられつつある。個人としても、どのようなことが必要なのか、時代とともにくりかえし検討してみることが必要であろう。

よみ、かき、計算ができる、というのは近代市民としてあたりまえのことである。現代では、それだけではすまなくなってきたのである。たとえば、電話帳のようなものでも、単に字がよめるといっただけでは、つかいこなせないものである。百科事典とか、図書館とか、そんなものも、よみ・かきだけでは利用できない。書類の整理、検討、発表というようなことになる、これはかなりの訓練がいる。今日では、情報の検索、処理、生産、展開についての技術が、個人の基礎的素養として、たいせつなものになりつつあるのではないか。

やや先ばしつたいいかなるかもしれないが、わたしは、たとえばコンピューターのプログラムのかきかたなどが、個人としてのものとも基礎的な技能となる日が、意外にはやくくるのではないかとかんがえている。すでにアメリカでは、初等教育においてコンピューター用の言語 FORTRAN をおしえることがはじまったようだ。社会が、いままでのように人間だけで

なりたっているものではなくって、人間と機械とが緊密にむすびあつた体系という意味で、いわゆるマン・マシン・システムの展開へすすむことが必至であるとするならば、それも当然であろう。

いっぽうでは、知的生産をめぐる物質的条件の変化が、現代人の、人間として必要な素養の性質を、おおきくかえつつあるということも、みおとすことはできないだ

ろう。かつて、紙の大量生産と印刷術の普及という条件のなかから、よみかき能力という、近代市民としての最低の素養が形成されたのである。今日の、情報産業の急速な発展のなかから、情報産業の時代にふさわしい、あたらしい知的生産能力が展開しはじめたとしても、すこしもふしぎではない。

コンピューターが家庭にまではいりこんで、それを操作することが人間としての最低の素養である、という時代がくるのは、もうすこしさきのことかもしれない。しかし、今日ですでに、大量の情報機械が、専門家の手をはなれて、一般市民の手につりつつある。その操作に習熟することは、現代の人間として当然の素養となる。たとえば、今日の日本では、写真機はとくに一戸一台の線をこえている。写真は専門家の技能にたよらなければならぬということか

んがえは、もうなくなつてしまった。テープレコーダーが、そのあとを追っている。むかしは、

機械といえ、しりごみしたひとがおおかった。いまでも、年配のひとのなかには、その傾向がのこっている。しかし、いまではもう、これらの情報機械のとりあつかいは、ふつうの人間にとって当然のことになってしまった。

そのような機械類のこともちださなくても、もつとかんたんところで、条件の変化はおこっている。たとえば、紙、ノート、カードのたぐいの、ほとんど無制限の供給は、学生文化のありかたを、むかしのものとはすっかりかえてしまった。万年筆のようなものだって、つい三〇年ほどまえまでは、「貴重品」としてあつかわれていたのである。また、スチール製の事務用家具の発展は、知的生産の技術に対して、あたらしい条件をつくりだしつつある。ファイリング・ケースやカード・ボックスのたぐいが、家庭や中学生の部屋にまではいりこみはじめてのである。こういうものの普及なしには、資料の整理などについても意味をなさないのである。

しかし、今日の日本において、そのような機械・道具・材料などの開発と供給が、満足すべき状態になっているかというと、かならずしもそうではない。やはり、いろいろと過去の時代の情性がのこっていて、あたらしい時代をむかえる姿勢がかならずしもじゅうぶんではない。日本の、情報文化の基礎をささえるものとして、このような物質的条件の検討を、もつとも

基本的なところからやってみようではないか、という提案をもふくめて、この「知的生産の技術」をかきはじめたのであった。

個人の知的武装

情報の時代の到来を予見してかどうかはわからないけれど、戦後の日本の社会は、かなりの程度に「事務革命」をやりとげたようにみえる。企業や官庁には、さまざまな事務機械が導入され、その能率は、いちじるしくたかくなった。そしてその革命は、いまなお、ひじょうな速度で進行中である。コンピュータが、競争のようにして企業のなかにはいりこみつつある。

それは、たいへんけつこうなことであるが、その企業にとめている個人に焦点をあわせてみると、かなりころもとない。会社には、事務のあたらしいシステムや機械がぎぎぎ導入されるけれど、そこではたらいっている人間は、むかしの、事務革命以前の時代の行動様式からあまりかわっていないのである。書類の整理のためのファイリング・キャビネットがあたえられても、そのなかには、ファイルのかわりに、上っぱりや運動ぐつがねむっていたりする。革命は、まだ個人のところまではおよんでいないのである。組織はうごいているが、個人のほうは停滞しがちである。

企業や官庁などの、組織における事務の問題については、たくさん本もでているようである。

ここでは、そういう問題はさけて、徹底的に個人における知的生産の問題を追求することしよう。組織と個人とは、おのずから目標もちがうし、問題のとりあげかたもちがうはずである。もつとも、組織の目標に個人がいかに適応するかをさぐろうというのではない。むしろ、情報の時代における個人のありかたをじゅうぶんにかんがえておかないと、組織の敷設した合理主義の路線を、個人はただひたすらにはしらされる、ということにもなりかねないのである。組織のなかにいないと、個人の知的生産力が発揮できない、などというのは、まったくばかげている。あたらしい時代における、個人の知的武装が必要なのである。

この意味では、この本は、企業にとつてはほとんど役にたたないだろう。この本は、はじめから個人を対象にしてかいている。はじめに、研究や勉強の仕かたの話をしたが、そのときに知的作業の個人的「聖域性」についてのべた。知的生産の技術の公開をとえながら、この知的作業の聖域性ないしは密室性という原則を、この本の全体をつらぬいてたもつてゆきたい。知的生産は、どこまでも個人においておこなわれるものである。

もつとも、べつな意味で、組織の問題があることは事実である。それは、たとえば研究における共同研究のように、複数の個人が協力して知的生産をおこなう場合である。それについては、またさまざまな問題がある。たとえば、チームのくみかた、討論の仕かた、会議の仕かた、

助手や秘書のありかた、研究室の経営の問題などである。そういう点についても、またいつか機会があればかんがえてみたいが、この本ではすべて割愛する。

この本の
ねがひ

この本でわたしは、たしかに、知的生産の技術について、かこうとしている。しかし、これはけつして知的生産の技術を体系的に解説しようとしているのではない。これは、ひとつの提言であり、問題提起なのである。これをよまれたかたがたが、その心のなかに問題を感じとつて、それぞれの個性的にして普遍的な知的生産の技術を開発されるための、ひとつのきっかけになれば、それでよいのである。そして、こういう問題を公開で議論するならわしが、これをきっかけにしてはじまるならば、わたしはたいへんうれしい。

よんでいただいたらわかることだが、この本は、いわゆるハウ・ツーものではない。この本をよんで、たちまち知的生産の技術がマスターできる、などとかんがえてもらつては、こまる。研究の仕かたや、勉強のコツがかいてある、とおもわれてもこまる。そういうことは、自分がかんがえてください。この本の役わりは、議論のタネをまいて、刺激剤を提供するだけである。

どのようなものであれ、知的生産の技術には、王道はないだろうとおもう。これさえしつていたら、というような安直なものはないだろうとおもう。合理主義に徹すればよい、などと、かんたんにかんがえてもらいたくないものである。技術という以上は、ある種の合理性はもち

ろんかんがえなければなるまいが、知的活動のような、人間存在の根底にかかわっているもの場合には、いったいなにが合理的であるのか、きめることがむつかしいだろう。機械や事務組織なら、きわめて目的合理性のたかいものをつくることもできるだろうが、人間はそうはゆかない。

知的生産の技術について、いちばんかんじんな点はなにかといえば、おそらくは、それについて、いろいろとかんがえてみることに、そして、それを実行してみることだろう。たえざる自己変革と自己訓練が必要なのである。

1 発見の手帳

ダヴィンチの手帳

あの本のことをおもいだして、書庫をさがしてみたが、いつのまにかなくしてしまつたらしく、みあたらなかつた。メレジュコフスキイの『神々の復活』という本である。

わたしがこの本をよんだのは、高等学校の学生のときで、もう二〇年以上もまえのことである。あるいは、いまでも新版がでているかもしれないとおもつて、岩波文庫の目録をめくつてみたが、絶版になつたのか、でていなかった。むかしのは、米川正夫さんの訳で、四冊本だった。

それは、レオナルド・ダヴィンチを主人公にした長編小説である。ひじょうな感動をもつてよみおえたことを、いまでもおぼえているが、なにぶんむかしのことだから、具体的な内容については、おおかたわすれてしまった。

そのなかで、ただひとつだけ、たいへん鮮明におぼえていることがある。それは、ダヴィン

ンチの手帳のことである。もつと正確に言えば、じつはその手帳の話がつなぎになって、こんなむかしによんだ本のこと、いまでもわたしの記憶のなかに、ときどきよみがえってくるのである。作者のメレジュコフスキが、どの程度に史実にもとづいてこの小説を書いたのか、わたしは知らない。しかし、とにかくわたしは、この本をなかだちにして、レオナルド・ダ・ヴィンチから「手帳」をもらったのである。

『神々の復活』にでてくるダ・ヴィンチは、もちろん、よく知られているとおりの万能の天才である。しかし、この天才には奇妙なくせがあった。ポケットに手帳をもっていて、なんでもかでも、やたらにそれにかきこむのである。町をあるいていて、であつたひとの顔の特徴をかきこむ。お弟子が買ひものについてかえつてくると、いちいち品物の値段をきいて、かきこむ。まったく、なんの役にもたちそうもないことまで、克明にかきこむのである。

高校生だつたわたしには、この偉大な天才の全容は、とうてい理解できなかったけれど、かれの精神の偉大さと、かれがその手帳になんでもかきこむことのあいだには、たしかに関係があると、わたしは理解したのである。それでわたしは、ダ・ヴィンチの偉大なる精神にみずからをちかづけるために、わたしもまた手帳をつけることにした。

わたしはこうして、手帳をつけるという習慣を獲得し、その習慣は、二十数年後のいまでも、

きえることなくつづいている。

ところで『神々の復活』に感動したのは、わたしばかりではなかった。わたしにわき「天才」たちは、幾人かのしたい友人のグループがあつたが、みんなつぎつぎにこの本をよ

んで、それぞれにつよく感動した。青年たちは、ダ・ヴィンチの偉大なる精神に魅せられて、それぞれにその偉大さに、一歩でもちかづこうとしたようである。

ただ、その接近法は、ひとつによつてちがつていた。いまは東京工大の教授になっている川喜田二郎君なども、そのときのグループのひとりだが、かれはもともと左ききだつた。ダ・ヴィンチが左ききだつたという事実は、かれをダ・ヴィンチにむすびつけるおおきい力となつていたかもしれない。かれは、『神々の復活』をよんで以来、左手で画をかくのが目だつてうまくなつたようだ。

偉大なる人格に対して、青年たちはしばしば、こういうふうなアイデンティフィケーションをこころみるものだ。話によれば、岡本太郎氏は、わかいときにおもつたそうである。古来、天才には猪首いぐほがおおい。おれは猪首だ。したがって、おれはやっぱり天才なんだと。

そこで、川喜田君は左ききであることによつて天才となり、わたしは手帳をつけることによつて天才になろうとこころみたのである。わたしとともに、なんにんもの友人たちが、おなじ

道をえらんだ。わかき「天才たち」は、ポケットから大型の手帳をとりだして、しきりになにやらをかきつけた。

ポケットに手帳をしのばせていて、ときどき必要事項を記入する、というほどのことなら、現代では、たいていのひとがやっている。知人の電話番号をひかえたり、つぎの会合の時間と場所をしるしたりするのである。こういうメモなしには、いそがしい現代の社会生活を、さしきわりなくいとなんでゆくことは、むづかしくなってきた。それで、そういう目的のためには、さまざまなくふうをこらした手帳がつくられている。

しかし、わたしたちがレオナルド・ダ・ヴィンチからまなんだ「手帳」というのは、そういうものとはまったくちがうのである。

ダ・ヴィンチが、じつさいにどんな帳面に、どんなことをかきいていたか、くわしいことはわたしは知らない。しかし、ダ・ヴィンチの手帳の実際がどうであれ、わたしたちはかれの精神に魅せられていたのである。あらゆる現象に対する、あくことなき好奇心、知識欲、包容力。そういうものにあこがれていたのである。そのあこがれから、わたしたちはわたしたちに、手帳にかくことがらの、内容と形式とを開発していった。わたしたちの手帳は、単なる実用メモではなかったし、また、日常生活の記録でもなかったのだ。

発見の手帳

わたしたちが「手帳」にかいたのは、「発見」である。毎日の経験のなかで、なにかの意味で、これはおもしろいとおもった現象を記述するのである。あるいは、自分の着想を記録するのである。それも、心おぼえのために、みじかい単語やフレーズをかいておくというのではなく、ちゃんとした文章でかくのである。ある意味では、それはそのままでちいさな論文——ないしは論文の草稿——となりうるような性質のものであった。すくなくともそういう体裁をととのえている。そのような豆論文を、毎日、いろいろな現象をとらえて、つぎつぎとかいてゆくのである。たまってみると、それは、わたしの日常生活における知的活動の記録というようなものになっていった。

友人たちの場合も、ひとつによって多少のちがいはあるだろうが、ほぼ、にたようなものであったかとおもう。わたしの場合、いまにのこっている何冊かの手帳をひらいてみると、まったくいろいろなことがかきつけてある。高校生のことから、学校の勉強のことや、読書の感想なんかがたくさんあつてもよさそうなものだが、そういう事項がほとんどない。そのかわりに、たとえば、イヌにかまれたときに、傷あとの歯型が、どういう形にならんでついたかとか、「すもうとり人形」の構造だとか、その日のたべものの種類と味の記述だとか、ニンニクの学名についての考察だとか、子どもの湿布の仕かただとか、そのほかまったく、いわばがらくた

いまでも文房具屋の店頭にたつと、むかしどおりのノテ・ボコがならんでいるので、おかしくなってくる。なぜ「筆記帳」などという、いわずもがなのことばを、それもわざわざ英語で、れいれいしく表紙に印刷しなければならぬのだろうか。それはおそらくは、明治時代にアメリカかイギリスからノートブックというものを輸入したときに、すでにそうになっていたからではないかとおもう。それ以来一世紀のあいだ、この文字は、日本のノートブックの表紙に、化石化したままつたえられているのであろう。おもえばながい伝統である。

ところで、こんなことをいいだしたのは、直輸入の伝統は、表紙だけでなく、ひよつとしたらノートのなかみまで、そうではなからうか、とおもったからである。ノートブックの「なかみ」というのは、あの、ケイのひきかたのことである。日本のノートブックのケイ線の間隔は、あれはいつたい、なにを基準にしてきめられているのだろうか。あれもまた、直輸入文化ではないだろうか。

わたしたちの天皇は、生物学者として、那須御用邸などにおける自然観察の結果を、天皇のノ
 ー
 ト 克明にノートにかいておられるそうだが、ゆうぜんたるかい書で、画数のおおい字

などは、線などにとらわれずに、平気で他の行にまで、はみだしておかきになるということである。まことに、帝王のノートとはそういうものかと、感心した。

しかし、かんがえてみると、そもそもあの大学ノートというものは、字体のかんたんな英字ならよいが、画のおおい漢字をかくには、一般に線のあいだがせますぎるのではないだろうか。あれでは、べつに帝王でなくても、はみだすほうがあたりまえかもしれない。あれはやはり、表紙の英語とともに、むかしのアメリカあたりで、Gペンなどをつかつて、ほそい英字をかいでいたころのケイの間隔を、そのまま直輸入しているのではないか、とおもうのである。いまの日本のように、万年筆やボール・ペンが普及して、それで漢字かなまじり文をかくようになると、まったくせますぎる。一行おきでちょうどよいくらいである。

それでも、あのせまいケイのあいだに、こまかい字で、きれいにノートをつけるひとがおおいのには感心する。ノートというものはこういうものだとおもって、うたがいてもせず、自分の字のほうをそれにあわせて、ちぢめてきたのであろう。日本に近視がおおいは、画のおおい活字のせいだということになっているが、ひよつとしたら、学生時代から、直輸入のノートにあわせて、ちいさい字をかくことを、しいられているからではないだろうか。

あの、大学ノートのケイの間隔は、ほんとうはなにによって規定されているのか、ご存じのかたはおしえていただきたい。

ノートの
進化

大学ノートのせまいケイのあいだに、こまかい字で、ぎつしりとかきこんであるのは、なかなかうつくしくもあるし、一種の迫力をも感じさせるものである。しかし、かいた内容をあとから利用するという点からみると、あれはかしこいやりかたではない。どこに、なにがかいてあるのか、検索に不便だからである。ノートは、むしろバラツとしていて、それでいて項目ごとにまとまりをもったかきかたをするのがよい。ぎつしりづめは、紙の節約というだけのことである。

高等学校の学生のころ、紙の節約をあきらめたとたんに、わたしのノートはたいへんよくなつたようにおもう。先輩をみならつて、紙の片面だけをつかう、というやりかたをはじめたからである。見ひらきの、右ページだけに内容をかき、左ページは白のままあけておく。あとで、左ページに、項目の見だしをあげ、右ページの本文の要約、註、参考事項などを記入する。ぎつしりづめより、はるかに見やすい。

学生時代にだれでも経験があることだが、ときどき講義をさぼつて、あとで友人のノートをかいてうつす。そのため、適当に、余白をとつておくのだが、なかなかうまく、そのなかにはまってくれないものだ。そこで、いつそのこと、追加さしこみ自由自在の、いわゆるルース・リーフ式のノートのほうが便利だ、ということになる。

怠慢の穴うめというだけでなく、かいた内容を分類・整理するためにも、ページの追加や順序の変更ができたらいのに、とおもうことがしばしばある。事項ごとにべつのノートを用意しておくというのもひとつの方法だが、とりあつかう事項が複雑になつてくると、何十冊もノートがならび、どれに記入するべきか、まよつてしまうというようなことになる。

そこでかんがえだされたのが、ルース・リーフ式のノートであろう。しかし、じつさいに売っているルース・リーフとバインダーをつかつてみると、とじこみリングの構造の部分のかさばりが意外に気になる。また、ルース・リーフがしつかり固定できず、ちぎれやすいし、大学ノートのかわりとしては、かなり欠点のおおいものである。

そういう欠点をのぞいて、ルース・リーフ式のよい点だけをいかしたのが、ちかごろ売られているラセンとじのファイラー・ノート式のものであろう。きりとり線と、つづりこみ用の穴とがついている。一冊のノートになんでもかきこみ、あとできりとり線からきりとりて、分類してルース・リーフ式にとじる。片面だけを利用し、内容ごとに——学生なら学科ごとに——ページをあらためることにしておけば、追加、組みかえ、自由自在である。

ノートから ノートのことを、くどくどしくのべたのは、じつはカードのことをいいたいからカードへであつた。わたしは、いろいろな形式のノートをつかつてみたが、どれにも満足

できなかった。けつきよく、いまではノートというものを、まったくつかわなくなってしまうた。そして、なにかもカードにかくことにしてしまったのである。職業がら、ずいぶん字がかくが、ノートブックというものは、もっていない。あらためて身辺をしらべてみたが、むかしのものはべつとして、現在つかっているものは、やはり一冊もない。さきにのべた「発見の手帳」も、ずっとまえからカードにかわっているの、いまでは、「発見のカード」というべきであつたかもしれない。

ノートをやめて、すべてカードにかくことにしていると、たいていのひとは、なにかひじょうにかわつた方法を実行しているような印象をもたれるらしい。ほんとうは、なにも特別のことなどありはしない。カードというのは、じつは一種のノートにほかならないのだ。とじてないというだけで、実質的にはノートとおなじなのである。

見かたをかえれば、ルース・リーフ式やファイラー・ノート式のノートは、じつは一種のカードなのである。すでにのべたように、それは、ページのとりはずし、追加、組みかえが自由にできるようになっている。そして、そのつかいかたにおいても、項目ごとにページをあらためる、あるいは片面だけを使用する、ということになると、それは要するに、みんなカードの特徴にほかならないではないか。ルース・リーフ式やファイラー・ノート式をつかっているという

ことは、すでにカードをつかつているのと、実質的にはあまりちがわないのである。

こうしてみると、ノートとカードの距離は、見かけほどにはとおくない。ノートからカードへの移行は、ほんの一步のことである。

じつは、ノートからカードへという移行は、われわれのような知的生産業者とは別個に、実務の世界においても、平行しておこっていたのである。戦後の実業界にまきおこつた大規模な事務革命のなかで、ひとつのいちじるしい現象は、帳簿の帳票化ということであつた。むかしの大福帳から近代的な帳簿をへて、今日では、いわゆる伝票式の帳票カードだけで、ひじょうにおおくの事務が処理されるようになってきた。ここでも、帳簿すなわちノートブックは、しだいに影がうすくなつてきているのである。ただし、税務署は帳票カードをもつて正式の書類とみなすことに抵抗をしめたという話だが、その点はけつきよくどういふことにおちつたのか、わたしはしらない。

野帳

わたしは、学生時代はもっぱらノートばかりで、カードは、文献カードのほかはしかなかった。文献カードというのは、図書や論文の著者名、掲載雑誌名、巻数、ページなどを記入したもので、直接必要な文献類については、自分でこれをつくつてもつていた。そのカードの用紙は、むかしから図書館用品として既製品が市販されていた。そのときどきの研

カードの
おおきさ
野外調査の資料の整理と、共同研究とをもとにして、カードによる知的作業の方式が開発されたいきさつをのべた。このような方式を、わたしたちはカード・システムとよびならわしてきた。カード・システムは、その後さまざまな方向に展開して、いまではずいぶんいろいろな用途にもちいられるようになっていく。

最初に、カードそのものについて、もうすこしくわしい記述が必要だろう。わたしのカード、あるいは、いまいうところの京大型カードについては、たくさんの人たちから、といあわせをうけた。見本を一枚くれ、という注文がずいぶんあった。ここでは、この京大型を例にして、一般にカード・システムにつかうカードとしては、どんなのがよいか、かんがえてみよう。カード・システムは、長期にわたって使用しつづけることを前提としている。途中でカードのサイズや紙質がかわると、たいへんまずいことになる。最初に、よいものを設計しておかなければならない。

3 カードとそのつかいかた

まず、カードのおおきさである。ふつうカードというと、どういうわけか、かなりサイズのちいさいものをおもいうかべるひとがおおいようである。わたしの経験では、おもいきつておおきくしたほうがよい。カードをつくりたいというひとに助言をもとめられて、いつも、おおきくしなさいと忠告するのだが、できあがりを見ると、せいぜいA6判(二〇・五センチ×一四・八センチ)くらいで、全部ちいさすぎる。ちいさいカードは、単語カードか図書カードにはよいかもしれないが、複雑な知的作業には不向きである。

京大型カードは、B6判である。B6というと、一二・八センチ×一八・二センチもあるから、ずいぶんおおきいものである。これだけあれば、たいいていの用はたせる。カードをつかいだしても、途中で腰くだけになって、やめてしまうひとがおおいは、ちいさいカードをつかつているからではないかとおもう。ちいさいカードでは、どうしても「おぼえがき」になってしまつて、本格的なノートのかわりにはつかえないからだ。

B6判というおおきさがよいのは、このサイズにあわせて、いろいろな事務用具が開発されていることである。たとえば、カードを収納するスチール・キャビネットや、臨時に必要なカードだけを収容するカード・トレーなども、ちょうどこのサイズのが売られだされている。また、三つ山、五つ山の「見だしカード」もできている。しかも、たいへんふしぎなことだが、B6

判のカードは、京大型をつくっている店をのぞいて、ほかからは発売されていないらしいことである。カードがないのに、いれものやアクセサリだけが売られているのは、どういうわけかという、それは、さきにのべたように、事務の世界では帳簿の帳票化がすすんでいるからである。これらのカード用品は、その帳票のためのものなのである。

紙質と印刷

カードをつくるときに、つぎにたいせつなのは紙質えらびである。不適當な紙をえらんでしまうと、カードをつかう意味が半減してしまう。

カードは、ただそれになにかをかいて、保存しておけばよい、というものではない。カードは、活用しなければ意味がない。カードは、くるものである。カード・ボックスにいれて、図書カードをくるように、くりかえしくるものである。そのためには、ある程度のおつみと、腰のつよさが、どうしても必要である。ふつうのノートの紙ではうすすぎる。うすい紙は、一枚づつていねいにめくらなければならず、カードをつかう利点のひとつの、手ばやく操作できるという点が、うしなわれてしまう。

といつても、現在市販されている図書カードなどの紙は、おおむねあつすぎる。あれは、タイプライターにいれると、はしのほうではカードがはねてしまつて、うてない。図書カードなどの用途には、それでもよからうが、ながい文章を、すみのほうまで記入しようとすれば、そ

れではこまる。どうしても、しなやかさが必要である。ちょうどよいくらいの「あつさ」と「しなやかさ」というのは、カードの片すみを二本の指でつまんでカードをたててみて、カードがかるうじてしやんとたつ程度の紙であろう。

紙の表面は、あまりなめらかなものはよくない。インクをよくすうほうがよい。カードは、どんどんかいて、かさねてゆくことがおいから、インクのかわきのおそいのは、こまるのだ。さまざまな条件を考慮にいれて、わたしはいま、一〇五キロの画紙の、それも裏をつかつている。裏というのは、ペンのすべりぐあいとタイプライターのうちぐあいからで、これは、このみの問題だろう。

カードにケイ線を印刷するかどうか、このみの問題だろうが、わたしは、あつたほうがよいとかんがえている。ただし、ケイ線を無視してもつかえるように、色はごくすいものがよいだろう。わたしは、うすい青の線をいれている。

ケイ線の間隔は、もちろん市販のノート類よりは、よほどひろくつてある。ほとんど一センチの幅があるから、天皇につかつていただいても、ほぼ大丈夫ではないかとおもっている。

それから、当然のことだけれど、裏には線は不要である。カードは、原則として片面だけでつかうもので、裏はつかわないほうがよい。また、表にも、ケイ線以外のものはなにも印刷

しないほうがよいだろう。いろいろお役所の書式ふうのものを印刷してみても、けつきよくは、つかいかたに制限がくわるだけのことだ。それに、ケイ線だけの場合は、印刷費が格段にやすい。

こうしてできあがつたカードは、一見なんの変哲もないものであるが、この単純さが、カード・システムの効果を發揮させるための条件なのだとおもう。カード・システムのためのカードは、多様な知的作業のどれにもたえられるような多目的カードでなければならぬ。よいいなものをつくれわえるほど、その用途はせめられるのである。

カードをほんとうに活用するためには、しじゅうもつてあるくようにしなければならぬ。もつてあらない。そのためには、くふうがいる。まず、表紙である。わたしはプラスチック製のかたい板をつかっている。それ二枚でカードをはさんで、ゴム・バンドでとめる。バンドを二本もかければ、固定して本のようになる。プラスチックの板は、たて・よこ

ともに、カードより数ミリずつおおきくしておけば、カードのはしがいたまなくてよい。板は、そのまま野外におけるちいさな机の代用にもなる。カードの左端よりに、穴をふたつあけて、リングをおすというくふうもあるが、そんなことをする必要はないとおもう。集金カードじやあるまいし、リングでとめなければならぬ理由は何もない。穴をあけたら、それだけカー

はじめての
きりぬぎ

小学生のころ、新聞に「良寛さま」という連載小説がのつていた。わたしたちは、担任の先生から、毎日その一回分をよんできかせてもらうのがたのしみだった。

先生は、その小説をきりぬいて、ながくつなぎあわせ、まき紙のようにまいて保存しておられた。良寛和尚の人がらとともに、新聞にはきりぬいて保存するにたる部分があるものだという事実が、ながくわたしの記憶にのこることとなった。

わたしが自分で新聞のきりぬぎということをはじめたのは、それからまだ何年も後のことである。いまわたしの手もとにのこっているいちばんふるいきりぬぎは、飛行機からとったヒマラヤの写真である。おおきなみごとに写真で、全部で一五枚ある。ヒューストン探検隊というのが、エベレストおよびカンチェンジュンガ山群で、「決死的飛行」によって撮影してきたものだと、説明にはある。写真でみると、その飛行機というのは、単発の複葉機で、「決死的」というのも誇張ではなかっただろう。そういう時代の話である。

4 きりぬぎと規格化

ところで、わたしのこの記念すべき最初のきりぬぎが、いつのものかわからないのである。新聞のきりぬぎのつくりかたなんか、どこでもならわなかったから、日づけをいれるということをしらなかつたのだ。新聞の名もかいてない。記事のなかには「本社日本版權所有」という字がみえるが、その「本社」というのはどこの本社なのかわからない。

年代は、しらべてみると、すぐわかった。メイソンの『ヒマラヤ——その探検と登山の歴史』(田辺・望月訳、白水社刊)の年表をくつてみると、ヒューストンの飛行は一九三三年におこなわれている。その年には、わたしは中学二年生である。

もつとも、メイソンによると、ヒューストン探検隊というのはかなりいいかげんなものだったらしく、写真も、エベレストとまちがえてマカルーをうつしてきたりしているという。しかし、写真の印象はいまみても強烈である。当時ようやく登山に興味をもつようになっていた中学生のわたしは、大感動で、このきりぬぎをつくる気になつたのにちがいない。

スクラップ
ブック
新聞記事のきりぬぎという作業は、たいていの人が、すくなくとも一ぺんは、やってみるものだろう。きりぬいて保存しておけば、いつかほたいへん役にたちそ

うな気がするのである。じつさい、新聞記事というものは、世界中の有能な記者たちが、金と時間とエネルギーをかけてしらべあげた情報集なのだから、まるで知識の宝庫の

ようなものである。保存と整理の方式をうまくたてておけば、だれにもひじょうに役にたつものとなることはうたがいをいれない。

問題は、その方式である。おもいついて、きりぬぎをはじめてみるひとはおおいけれど、よい方式がみつからないまま、せっかくのきりぬぎがあまり役にたたなかったり、あるいは、ながつぎせずにやめてしまつたり、という場合がすくなくないようだ。

わたしの最初のきりぬぎは、いわゆるスクラップ・ブックにはつてある。ページを追つて、紙の表にも裏にも、ペタペタとはりつけてあるだけである。スクラップ・ブックは、三〇年まえも、いま文房具店に売っているのも、ほとんど変化がない。何十年もまえから、きりぬぎの保存と整理は、スクラップ・ブックが決定版ということになっているのだろうか。

わたしは、どうもそうではないようにおもふ。スクラップ・ブックというのは、きりぬぎをつくつた順にならべているだけのことで、内容についての分類と整理をまったくゆるさないからだ。わずかな枚数ならそれでもすむが、すこし量がたまつてくると、どうにもならない。どこになががあるかわからなくなつて、かんじんのときに必要な記事がでてこないから、なんにもならないのだ。わたしはまもなく、そのことに気がついて、スクラップ・ブックをやめてしまった。そして、それにかわるうまい方法をしらないままに、新聞のきりぬぎづくりそのもの

のに興味をうしなってしまったのである。

しかし、何十年もまえから、おなじ型式のスクラップ・ブックが売れつづけているのはふしぎなことである。買った人は、いったいどういうふうな、それをつかっているのだろうか。あれでは、とうていうまくやれるとはおもえないのだが。ひよつとしたら、あれは永遠に初心者むきの材料として売れているのかもしれない。だれでも、一、二冊ほどつくつてみて、これはだめだと気がついて、やめてしまうのではないだろうか。

台紙にはる

ながい中断のち、一九五〇年ころから、わたしはやや体系的に新聞記事のきり

ぬぎをはじめようになった。こんどかんがえた方式は、スクラップ・ブックをやめて、ばらの台紙にはる、というやりかたである。ハトロン紙をA4判のおおきさにきつて、その片面にだけ、きりぬぎをはりつけた。そして、記事の大小にかわりなく、台紙一枚に記事一つという原則をかたくまもることにした。たいていの記事は、A4判のおおきさ以内におさまる。それよりおおきい記事は、一部にのりをつけて、あとはおりたたむようにする。どんなに小さい記事でも、一枚に一つである。台紙には、新聞の名まえと日づけを、かならずかきこむ。

こうしておけば、あとは分類・整理は自由自在である。似た記事、関係のある事項のは、い

つしよにまとめておくこともできるし、必要に応じて順序をくみかえることもできる。

この方式は大成功で、わたしの新聞きりぬぎ事業はこれでやつと安定した。この方式で一ばんの問題点は、むしろ、きりぬぎをつくるまでの工程にあった。きりぬいて台紙にはる作業は、子どもたちのアルバイトということにしてあるが、どの記事をきりぬくかは、わたし自身が指定しなければならぬ。あかいクレヨンでかこいをするのだが、ついついおこたつて、新聞をためてしまう。未指定の古新聞が山のようにたまって、するともならず、そのおき場をめぐつて、妻とのあいだに紛争がたえないのである。

整理と保存の方式として、はじめにかんがえて実行したのは、仕わけして
仕わけ棚からオー
ブン・ファイルへ
棚にいれるという方法であった。仕事部屋の壁面一ぱいに、ベニヤ板で、
底板だけのひきだしのようなものをつくつたのである。板のあいだを五セ

ンチくらいにすると、百数十個の細分された空間ができた。それだけの個数の分類項目を設定できるわけだ。それぞれの項目の場所をきめ、台紙にはったきりぬぎをそれぞれの項目の場所にくばつていれた。きりぬきだけでなく、パンフレットなどの資料もいっしよにいれた。資料を、「頭にいれずに棚にいれる」などといって、得意になつていたものである。

この方式は、いちおう便利だが、分類項目が固定してしまうという欠点がある。分類項目は、

5 整理と事務

本居宣長
の話

わたしが小学生のころの教科書にあった話だとおもうが、本居宣長は、自分の家の書棚から、あかりをつけずに必要な本をとりだすことができたという。また、どこそこの棚の右から何番目、といわれていつてみると、ちゃんとその本があつた、というような話もきいた。

むかしの人は、記憶力のよいひとを頭のよいひととおもうくせがあつて、博覧強記というのは知識人に対する最大のほめことばだったようだ。それで、この話も、本居宣長の絶大な記憶力を立証する話として、きかされたようにおもう。しかし、これはじつは記憶力の話ではないので、宣長の「整理のよさ」をものがたつていただけのことであろう。整理の方法さえよければ、これくらいのことば、だれだつてできる。

わたしは子どものころから、もの、もの、のよいほうで、いろいろなものを保存するくせがあつた。ごくつまらない道具類のこわれたものだとか、けしゴムのかけらだとか、そういうガラク

夕類まで、たいせつな宝物みたいに、どこかにしまいこんでいたのである。おおきくなつてからは、ものばかりか、友人たちからもらった手紙類や、学校関係のパンフレット、紙きれまで、後生大事にのこすようになってしまった。ただし、いっさい整理ということをしらないから、なんでもかでも、箱のなかに乱雑につめこんでいただけである。わたしはいまでも、すくなくとも高等学校時代からの、このような「遺産」の山を、なすすべもなくかかえこんでいる。

学生時代はためこむだけでよかった。いよいよ自分の仕事が始まつてみると、これではどうしようもなかった。まえにきた手紙が、必要なときにでてこなかったり、会の印刷物が、みようとおもうときにゆくえ不明だったりして、たいへんこまつた。どういう整理法をとればよいのか、そんなことをおしえてくれるひとなかった。わたしは、自分自身の文書を整理するために、いろいろなことをやってみた。なんべんも失敗したが、そのたびに、すこしずつしかしくなつた。そして、どうやら整理についての基本的原則みたいなものが、すこしわかつたやうな気がしている。

整理と整頓 整理とはどういうことか。あるいは整理の原則はなにか。こんなことも、わかつてしまえば、ばからしいようなことだ。だれかがおしえてくれれば、苦労するこ

ともなかったのだ。しかしわたしは、運わるく、そういうひとにも本にも出くわさなかった。

いまでは、加藤秀俊君の『整理学』(中公新書)というような本があつて、現代社会における整理の問題を要領よくおしえてくれる。ここでは、例によつて個人の知的生産活動に密着したかたちで、この問題をかんがえてみよう。一般に、整理というのはどういうことなのか。どういう状態になれば、よく整理されているといえるのか。

整理というのは、ちらばっているものを目ざわりにならないように、きれいにかたづけることではない。それはむしろ整頓というべきであろう。ものごとがよく整理されているというのは、みた目にはともかく、必要なものが必要なときにすぐとりだせるようになっていて、ということだとおもう。

世のなかには、一見乱雑にみえて、そのじつ、まったく整理のよいひとがいる。逆に、本や書類を整然とならべているくせに、必要なときにはなにもでてこないというひともある。整理がよくて整頓のわるいひとと、整頓がよくて整理のわるいひととがある、というわけである。

整理は、機能の秩序の問題であり、整頓は、形式の秩序の問題である。やつてみると、整頓よりも整理のほうが、だいぶんむづかしい。たとえば、書斎のなかをきれいに整頓することはだれでもできるが、整理することは本人でないとできない。

おき場所の体系化

こういう意味での整理を実現するためには、いくつかの原則があるようにおもふ。第一に重要なのは、それぞれのものの「あり場所」が決定されている、ということだとおもう。あり場所が、そのときどこにかわるのでは、どうしようもない。べつ

ないいかたをすれば、整理の第一原則は、ものの「おき場所」をきめる、ということである。

つぎに、その「おき場所」のきめかたは、体系的でなければならぬ。せつかくおき場所をきめても、そのきめかたに法則がなければ、とうてい記憶しておくことができないから、けつ

きよく必要なときに必要なものがでてこない。「おき場所」の体系として、どういうものを採用するかは、ものによつてちがう。整理の方法の研究とは、じつはこの体系の研究なのだ。カ

ードの分類・配列をどうするか、本棚に本をどのようにならべるかなど、みなそれである。

本の場合、わたしは現在では、自分の蔵書はUDC(Universal Decimal Classification 国際十進分類法)を基礎とした分類法で配列している。本を、たとえば新書判とかB6判などの判型によつ

てそろえてならべるひとがあるが、それでは、みた目にはきれいに整頓されていても、整理されたことにはならない。本居方式も、そんなものではなかったにちがいないとおもう。

「おき場所」のつぎは、「おきかた」の問題だ。おくときには、つんではいけない。なんでもそうだが、とくに本や書類はそうである。横にかさねてはいけない。かならず、たてる。ほん

とうにかんたんなことだが、この原則を実行するだけでも、おそろしく整理がよくなる。せつかく分類のシステムをかんがえても、横につんであれば、その配列どおりにならべることさえできないのだ。

おき場所がきまつたら、そのおき場所をまもらなければならぬ。つまり、とりだしたら、あとはかならず、もとの位置に「もどす」。これがつぎの原則である。わかりきったことだが、これを厳格に実行できるかどうか、整理がうまくゆくかどうかのきめ手である。とりだしたことをはつきりさせるために、本や書類なら、そこに「とりだし票」をくふうしてさしこんでおく。

整理法の模索史

わたし自身の書類の整理法の歴史をふりかえってみると、まったくばかげたことをくりかえしてきたのだとおもう。もちろん、右の諸原則からはずれている。

はじめのころは、たまつた書類を、ひもでくくるか、いくらか分類して糸でとじるか、していた。しかし、これでは全然整理したことにならない。このやりかたは、文書を保存しているというだけで、実際問題としては、必要なときに過去のデータをよびだすことはできないのである。過去は、おしいれのくらやみのなかで、永遠にねむりこんでしまう。必要に応じて、過去を現在によびおこすということこそ、整理ということなのである。

6 読書

よむ技術 この本の前半では、手帳、ノート、カード、ファイルなど、いわば知的生産における装置の問題を主としてとりあげてきた。これから、後半は、主として「よみか

き」について、つまりいわば、知的生産における様式の問題をとりあげることしよう。まず、読書をとりあげる。もちろん、知的生産の技術としての読書である。

読書については、むかしからのえらい人たちが、さまざまな教訓をのこしているのです。読書法に関する本もたくさんありそうにおもえるが、さがしてみると、案外すくない。何をよむべきかという専門別の読書案内にはこと欠かないが、本というものはどのようにしてよめばよいかという技術指導書となると、じつはあまり見あたらないのである。

すぐ手にはいる本で、もつとも正統派的なのは、小泉信三『読書論』(岩波新書)であろう。記述のスタイルは、ややクラシックだけれど、さすがに耳をかたむけるべき内容にみちている。また、大内兵衛・茅誠司他『私の読書法』(岩波新書)が役にたつ。さまざまな分野の二〇人の人

たちが、それぞれ「私の」読書法を執筆しているのだが、なかなか個性的でおもしろい。かならずしも技術の本ではないが、技術についてもおおくのがかたられているので、その意味で役にたつといったのである。

よむことと
たべること

おもしろいことには、この本のなかに、読書と食事とのアナロジーが、くりかえしでてくる。なんにんものひとが、よむこととたべることとのあいだに共通性をもとめているのである。たとえば、中村光夫氏は、現代における書物のはんらんという悪条件のなかで、精神の健康をたもつための方法として、読書法はちょうど食物に関する栄養学のようなものだ、といっている。また、田中美知太郎氏は、材料の配合をかんがえてバランスのとれた健康的な食事を用意する一種の料理法みたいなものが、読書についてもかんがえられるであろうとのべている。たしかに、「書物は精神の糧」というかんがえかたは、むかしからあるのであつて、このようなアナロジーがでてくるのも、もつともな話であつた。

ここにあげた例は、栄養学といい料理法といい、どちらも健康との関係において食事をとらえている。つまり、読書を精神の健康にかかわりあうものとしてとらえる、という見かたである。しかしながら、読書と食事とのアナロジーは、もうすこしべつな面でも成立するようだ。食事には栄養ないしは健康という面と、味覚のたのしみという面とがあるように、読書にも、

精神の糧という面と、心のたのしみとしての読書という面とがあるのではないか。栄養学と食味評論とはつきりちがうように、読書論においても、技術論と鑑賞論とは、いちおうべつのこととかんがえたほうがよいことなのである。じつをいうと、ふつう読書についてのべられていることは、このふたつの区別が、かならずしもはつきりしていないのである。だから、へたをすると、栄養料理の教科書のつもりでよみだしたのに、食道楽の「通」談義をきかされた、というようなこともおこりかねない。

ここで、知的生産のための読書法と、話題を限定したのは、そういうこともかんがえてのことである。どの料亭の何の料理がうまい、などということは、ここではいっさいいわない。どういう材料を、どう料理して、どのようにたべれば、ほんとうに血になり、つぎの活動のエネルギー源になりうるかという技術論が、この問題なのである。

本ずきの
よみべた

日本は、世界有数の出版国で、読書人口もまったくおびただしい数にのぼる。それらの人びとが、それぞれの方法で本をよんでいるわけだが、それほどの読書国にもかかわらず、能率的・合理的な読書技術の開発という点では、あまりみるべき成果はあがっていないのではないか。さきにあげた『私の読書法』のなかでも、渡辺照宏氏は、日本の大学では、本のよみかたなどをおしえられる機会がすくないのではないか、ということ

指摘しておられる。じつさい、アメリカの大学のように、来週までにこれだけよんでこいと、部あつて本を何冊もわたされるといふようなこともない。どうも日本の教育は、やつぱり教科書中心・講義中心で、本をよませるといふ訓練方式がひどく欠けているのではないだろうか。わたし自身の学生時代をふりかえってみても、読書法についての指導は一ぺんもうけたことがない。現在の学生も、事情はかわつていないようである。

それでは、みんなどうしているかという点、見よう見まねで、試行錯誤をくりかえしながら、どうやら自己流の読書法をこしらえあげてゆくのである。その結果であろうが、今日のりっぱな知的職業についている人たちにも、おそろしく読書法のへたなひとがいるものである。わたし自身も、わかいときにもっと読書法の訓練をうけていたら、いまごろはどんなにか学識ゆたかになつていたことだろうと、ざんねんにおもう。

読書法などというものは、本来たいへん個別的なものであるから、各自で自分に適した流儀のものをつくりだすほかはない、というかんがえかたもある。たしかに、けつきよくはそうだろうが、はじめからそういつたのでは、技術の公開、共同開発の道をとぎてしまふことになり、結果的には秘伝主義になる。教育や訓練ということもありえなくなる。実際問題としては、おおくのすぐれた知識人の意見をきいてみると、意外に共通の技術や読書方式があるものだ。そ

ういうもののいくつかをひろいだしながら、わたし自身の経験をもくわえて、読書の技術についてかんがえてみよう。

まず、本というものは、はじめからおわりまでよむものである。さきの『私の読「よんだ」と書法』のなかでも、なんにんものひとがこのことをのべている。渡辺照宏氏の文「みた」

章のなかで、「扉から奥づけまでぜんぶよむ」という文句をみつけて、おもわずふきだしたが、それほどまででなくとも、とにかくよみだしたら最後までよむというのは、うまい読書法のひとつだとおもう。

それはなぜかという点、それが、著者のかんがえを正確に理解するための基本的条件のひとつだからである。どんな本でも、著者には全体としてひとつの構想というものがあつて、それによつて一冊の本をまとめているのである。各部分は、全体の文脈のなかでそれぞれしるべき位置におかれることによつて、意味をもっているのである。その構想、その文脈は、全部をよむことによつて、はじめて理解できるたちのものである。

著者というものは、本をかくときには、当然のことながら、わかりやすくかかねばならない。つまり、読者の身になつてかくのである。同時に、読者というものは、本をよむにあつては、著者がなにをいおうとしているのかを理解しようとしてとめなければならない。つまり、著者の

7 ペンからタイプライターへ

「よむ」ことにつづいて、こんどは「かく」ことをかんがえてみよう。知的生産の日本語を技術としては、よむ技術よりもかく技術のほうに、はるかに問題点がおおい。一般「かく」に、よむよりかくほうが、ずっと難儀で、時間もよけいかかるものであることは、

いうまでもないが、とくに日本語では、かくことにおおくの問題点がある。

近代日本語は、いろいろな点で、ひじょうに変化のはげしい言語であるが、それはとくに、「かきことば」において、いちじるしい。じつさい、かかれたものをくらべてみると、一世紀まえの文章と今日の文章とでは、これが同一の言語のものであるとは、とうてい信じがたいほど、ちがったものになってしまっている。しかも、その変化は、戦後において、とくにはなはだしい。そして、現在もおお進行中である。

これだけはげしく変化をとげながら、近代日本語は、かきことばとして、完成の域にちかづいたとは、まったくかんがえられない。むかしからの問題点が、いくつも未解決のまま、もち

こされているのである。たとえば、現代日本語においても、その表記法は、きわめて不安定である。これは、ことばのかきかたの規準になる、いわゆる正字法が確立していないためであるが、現代における文明語で、正字法をもたない言語というのは、ちよつと類がないのではないだろうか。こういうことをかかんがえると、今後まだ、どういうことになるのか、予想もつかない。

わたしは、この激動の時代のまっただなかで、自分の「かきことば」の形成をおこなわねばならなかった世代に属している。それだけに、この日本語の変化と問題点を、自分自身の変化と問題点として、うけとめてきたようなところがある。さまざまなうごき、ながれを、目のまえにみてきたし、自分自身も、そのうず、にまぎこまれたこともある。そのような体験をふりかえりながら、この、日本文明の大変動期における、「かく」技術の変化と問題点について、かかんがえてみることにしよう。

筆墨評論

まず、かく道具の話をしよう。日本語をかくための筆記用具として、むかしにくらべていちばんかわつたのは、毛筆をつかわなくなったことだろう。わたしの少年時代には、まだ毛筆がきの手紙はふつうだった。帳簿も筆でつけているひとがすくなくなかった。この伝統は、履歴書をかくときに、かろうじてのこっているが、それもいまは、きえようとし

ている。わたし自身は、この世代の人間としては、むしろ毛筆を愛用したほうであろう。いまでもしばしばそれをもちいる。

わたしは、筆の銘柄など気にしないたちだが、むかしの文化人は、文房具については、なかなかうるさかった。本場の中国では、ふるくから、いろいろと文房具の品さだめがおこなわれていて、たとえば、スズリは端溪たんけいとか、湖筆こひつ徽墨きぼく（筆は湖州産、墨は徽州産をよしとする）とか、きまり文句もできていたのである。その風が日本にもはいつてきて、日本の文人墨客たちも、けつこう何やかやと筆記用具についての論評をたのしんだ形跡がある。

そういう風潮はいまでもある。いまは、論評の対象はもっぱら万年筆になっているようだ。ものをかくひとのなかには、万年筆についてはずいぶんくわしいひとがおおい。シェーファーがどうの、パーカーのインクはどうのと、なかなかうるさいことをいう。まさに、現代における湖筆徽墨の論である。食味評論とか旅行評論とかにならつて、こういうのは、筆墨評論とでもよぶことにしたらどうであろうか。

わたし自身は、毛筆とともに、万年筆の銘柄については、まるで関心がない。ぼつてりと、ふとくかけさえすれば、なんでもよい。

鉛筆から
万年筆へ

だいたい、万年筆というものも、つかいだしたのはこの数年来のことで、それまでは、つかったことがなかった。ときどき原稿まで鉛筆でかくひとがあるが、わたしもそうだった。それが、どういうわけか、ある原稿をかいているさいちゅうに、まったくつぜんに万年筆がつかってみたくなり、文章の途中で鉛筆をおいて、万年筆とインクを買いにはしった。つかってみると、たいへんよろしい。その原稿の、その行のまんなかあたりからはじまって、今日にいたるまで、わたしは、原稿をすべて万年筆でかきつけているのである。

だいたい、鉛筆をつかうというのは、小学生時代におしこまれた習慣が固定した、というだけのことはないのか。わたしは、万年筆に転向してよかったとおもっている。鉛筆がきの利点は、かんがえてみると何も無い。原稿をかくとき、鉛筆だと、コシコシとけしゴムでけしながら。かき損じたところをけせるのはよいが、あたり一めんゴムくずだらけになる。また、鉛筆はしじゅうけずらなければならない。わたしは、旅行のときも手まわしの鉛筆けずり機をカバンにいれてもちあるいていたものだ。書齋用に、電動式の自動鉛筆けずり機を買わねばならないな、とおもっていた。こういうめんどうが、万年筆に転向してから、みんななくなった。電動鉛筆けずり機は、買わずじまいだった。

なによりも、原稿のことをかんがえると、鉛筆から万年筆にかわってよかったとおもう。編集・印刷の仕事にたずさわる人たちにとって、鉛筆がきの原稿ほど、こまるものはないそうだよみにくく、すぐこすれてわからなくなるといふ。そういうこともしらずに、ずいぶんながいあいだ、めいわくをかけてきたのだった。

かき文字の美
学と倫理学

ひとさまにさしあげる手紙は、どういうわけか、鉛筆がきでは失礼だということになっていふ。わたしも、手紙だけは、まえからペンでかいた。ところが、このペン字というものは、ひどくむづかしいものである。

毛筆なら、ふとさと筆勢で、なんとかかつこうがつくが、ほそいペン先で字をかいても、なにともしずいくな形になって、いやである。一字一字が、かつこうがつかないうえに、全体の字くぼりがむづかしい。びんせんに手紙をかいても、うつくしくかけたためしがない。ほんとうにじょうずな字で、きれいに書いた手紙をもらうと、返事をかくのがいやになる。自分ではかけないのに、美的感覚だけがするどくなるといふのは悲劇である。わたしは、だんだんと筆不精になった。

毛筆の字はもちろんのこと、ペン字だって、日本では美的鑑賞の対象である。そればかりか、筆跡は人がらを反映する、などというばかげた迷信があつて、字は、倫理的批評の対象にさえ

情報交換
の技術

つぎは手紙についてかこう。

8 手 紙

手紙かきも知的生産の一種であるといえ、やや拡張解釈にすぎるであろうか。しかし、すくなくともそれが、知的生産のための重要な補助手段であることはまちがいない。文通によるさまざまな情報の交換が、わたしたちの知的活動をおおきくささえていることは、うたがいをいれないからである。

もつとも、手紙のかきかたなんぞ、小学生でも知っていることで、いまさらその技術論でもあるまいという感じはある。ところが、実状はどうも、そんなことではなさそうである。小学生でも知っているはずのことを、知的職業についているりっぱなおとなが、しらないことがおおいのではないか。そうとしかおもわれない事例に、しばしばであうのである。

現代日本社会は、どうも、手紙の技術の開発と洗練をおろそかにしたために、手紙による通信、情報交換の体系は、今日容易ならぬ状況にたちいたっていると、わたしはみている。

もつともここで、じょうずな手紙文のかきかたをかんがえてみようという気はない。手紙の内容ないしは文章については、問題にしない。問題は、手紙の形式である。

手紙形式の収 れんと放散

わたしは、職業がら外国人から手紙をもらうことがおおい。それらの手紙をみているうちに、おもしろいことに気がついた。外国からの手紙は、差出人の国籍からいえば、数十カ国にわたり、かかっている言語もいろいろなのだが、その形式についていえば、ほとんどおなじなのである。日づけ、あて名、本文、署名と、型どおりにならんでいる。ペンのぎも、タイプライターがぎのもあるけれど、全体の形式はおなじである。根本的にちがう形式のは、みあたらない。

おそらくどの文化にも、むかしは、それぞれの固有の手紙形式があつたのだろうが、今日の世界においては、それがしだいにひとつの型に収れんしつつあるのではないか。手紙の形式という点では、すでに全地球的な、人類共通文化が形成されつつあると、わたしはみているのである。

ところが、目を日本にうつすと、これはだいぶんうすがちがう。わたしはもちろん、日本人からたくさん手紙をもらうが、こちらのほうは外国人からの手紙とは正反対で、じつにバラエティーがある。その形式は千差万別、あきれるばかりである。タテがぎのとヨコがぎのと

があることは、やむをえないとしても、おなじタテがぎでも、あて名があつたりなかったり、日づけがあつたりなかったり、署名があつたりなかったり、じつにいろいろである。

かきかたのことをいうまえに、紙についていうべきかもしれない。手紙の用紙が、まことにさまざまなのである。あついのあれば、すぎとおるほどうすいのもある。ケイのあるのも、ないのもある。手紙はびんせんにかくものだ、などとおもっていると、おおまちがいで、ほかの用紙を流用したもののほうがおいだろう。原稿用紙もあるし、レポート用紙もある。意外なのは、ノートをやぶつて、それにかいた手紙がよくあることだ。なかには、レポート用紙にタテがぎで、ちいさい字をぎつしりかきこんだのを、ノリでつないで、まき紙のようにまいてある、などというかわった形式もある。

かく道具も、毛筆はさすがにすくなかったが、ペンのほかに、ボールペンも鉛筆もある。要するに、どうでもよいのである。現代の日本においては、手紙の形式などというものは、どんなでもかまわない、ということになってしまっているらしいのである。国際的には、手紙の形式はひとつのものに収れんして、人類共通文化を形成しようとしているのに、国内的には、日本の手紙はまさに百花斉放、ますます放散する方向をたどりつつあるようにおもえるのである。

形式の崩壊

どうしてこんなにデタラメなことになっているのだろうか。さきに、小学生でも知っているといったが、ほんとうに知っているのだろうか。ひよつとしたら手紙のかきかたなどは学校で教えなくなっているのではないか。ためしに、うちの子どもたちにならねてみた。中学や高校で、手紙のかきかたをならうか。すると、質問の意味がよくわからないのである。手紙の文章のかきかたのことか、という。それなら、たしかに国語科で手紙文をならった。しかし、手紙の形式のことはならっていないのである。手紙には形式があるという認識さえ、はつきりしていないのである。

この点は、うちの子にかぎらず、おそらくは一般にそうなのだろうとおもう。現代の日本の普通教育では、手紙文はおしえても、手紙のことはおしえないのだろう。わたしは、教育関係の人たちからもたくさん手紙をもらうが、ほかの職業のひとつにくらべて、とくに形式が確立しているということはない。おなじように自由奔放である。

このことは、かなりおどろくにたることであろう。日本は世界の大文明国で、教育は普及し、識字率のたかいことで有名である。国民のだれもが、手紙をかき、手紙がよめるのである。それにともなうてか、郵便物の量のおいことも世界有数である。UPU(万国郵便連合)の分担払込金も、一級国あつかいである。いわばそういう郵便文化のさかえている国で、普通教育に

おいて手紙のかきかたのきまった形式をおしえないというのである。ふしぎな文化といわなければなるまい。

これはしかし、教育界の怠慢とはいえないかもしれない。おしえようにも、おしえるにたるほどのものがないのである。手紙のかきかたについて、普通教育でおしえるほどには、形式が確立していないのである。

しかし、日本において、もともと手紙の形式が確立していなかったわけでは決していない。むしろ、厳格といえるほどの型があった。紙の質、おおきさ、おりかた、書式、文体、用語にいたるまで、きちんとときまりがあつたはずである。それが、近代になつてから、急速にくずれた。和紙から洋紙へ、毛筆からペンへ、そしてタテがきからヨコがきへという、かきもの一般の根本的変革とともに、ふるい形式はあえなくくずれ、しかもあたらしい形式は真剣に開発されることもないうちに、今日の混乱時代をむかえてしまったのである。

こういうことになるにいたつたのは、ひとつには、なにごとも「形式よりは内容」というふうにかんがえる風潮と関係があるだろう。形式をおもんじすぎた過去への反発もあつて、とくに戦後はこの傾向がよくなった。内容第一主義というのは、それ自体としては、たいへんけつこうなかんがえかたであろうが、それも程度による。高等教育をうけた人間が、原稿用紙や

せつだ、ということである。自分の交友範囲のアドレス・カード群をつねに整備しているというのは、現代人のひとつの基礎的教養ではないかとさえ、わたしはかんがえているのである。

9 日記と記録

自分という他人との文通

年末になると、書店の店さきに日記帳がならびだす。製本も装丁もりつぽで、上等の本にもまけないし、内容もさまざまな記事をいれて、くふうがこらしてある。全国でどれほどの部数が売れるものかしらないが、日本における日記人

口というものは、そうとうの数のものにちがいない。

もつとも、日記帳を買っても、そのうちのどれだけのひとが、しまいまでつけとおすかは、たいへん疑問である。どうやら、途中でやめてしまうひとのほうが、おおいのではないか。日本人の成人で、日記をつけたことがないというひとめずらしいだろうが、一日も欠かさず、つづけて日記をつけているというひと、あまりたくさんはないだろうとおもう。わたし自身もその多数派のひとつであって、日記をつけた経験はたびたびあるが、まったく断続的である。しかし、ぬけている日はたくさんあっても、ともかくも毎年の日記というものがのこっているから、むしろこれでも日記をよくつけているほうの部類に属するかもしれない。

日記とはいったいなんであるか、などという本質論はあとまわしにして、とりあえず、日記のかきかたについて、しるそう。こういうことも、前章の手紙の話とおなじで、学校でもおしえないし、一般にも議論されることがない。そのため、形式や技法がいつこう進歩しないのである。新年に日記をつけはじめても、まもなくやめてしまうひとがおおいというのは、ひとつにはその技術の開発がおくれているためであつて、かくひとの意志薄弱とばかりはいえない点もあろう。

日記は、ひとにみせるものでなく、自分のためにかくものだ。自分のためのものに技法も形式もあるものか。こういうかんがえかたもあろうが、そのかんがえは、ふたつの点でまちがつているとおもう。第一に、技法や形式の研究なしに、意味のある日記がかきつけられるほどには、「自分」というものは、えらくないのがふつうである。いろんなくふうをかさねて、「自分」をなだめすかしつつ、あるいははげましつつ、日記というものは、かきつけられるのである。第二に、「自分」というものは、時間とともに、たちまち「他人」になつてしまうものである。形式や技法を無視していたのでは、すぐに、自分でもなんのことがかいてあるのか、わからなくなつてしまう。日記というものは、時間を異にした「自分」という「他人」との文通である、とかがえておいたほうがよい。手紙に形式があるように、日記にも形式が必要で

ある。

魂の記録と経験の記録

どういうわけか、日記には心のなかのことをかくものだという、とほうもない迷信が、ひろくゆきわたつているようにおもわれる。わたしは、「よんでみてくれ」といつて、日記をわたされた経験が、なんともある。日記をひとによませることによつて、自分の思想や苦悩を理解してもらおうという、一種の、つきつめたコミュニケーションの方法である。よんでみると、それは例外なく、その種の「内面の記録」であつた。わかい人たちにたずねてみると、かれらのかく日記というのは、大部分が、やはり心か魂の記録でうめられているようである。そして、日記とは、そういうもの——ひめられたる魂の記録——だとおもっている、というのである。

どうしてこんなことになつたのか。ひとつには、日記のことを文学の問題としてかんがえる習慣があるからだろう。じつさい、教科書や出版物などで紹介されている日記というのは、おおむねそのような内面の記録か魂の成長の記録かである。それはそれで意味のあることで、日記文学というものがあることも否定はしないが、すべての日記が文学であるのではない。文学的な日記もあれば、科学的な日記もあり、実務的な日記もある。日記一般を魂の記録だとかんがえるのは、まったくまちがいである。日記というのは、要するに日づけ順の経験の記録のこ

とであつて、その経験が内的なものであらうと外的なものであらうと、それは問題ではない。日記に、心のこと、魂のことをかかねばならないという理由は、なにもないのである。日記をかくうえに、このことは、かなりたいせつなことだと、わたしはおもう。

自分のための業務報告

心の問題にまつたくふれない日記とは、どういうものか。たとえば、航海日誌とか業務日誌のたぐいをおもいうかべればよい。その個人版である。自分自身にこういうつもりでかいた日記のほうが、ほんとうは役にたつ。いきおいドライな記述がおおくの部分をしめることになるだろうから、文学作品や教科書の文例にはなりにくい。個人にとつて、ほんとうに日記をつける意味があるのは、心の問題よりも、むしろこういう部分だと、わたしはかんがえている。その日その日の経験やできごとを、できるだけ客観的に、簡潔に記録しておくのである。もちろん、内的な経験を排除する必要はない。思想も、感情も、客観的に、簡潔に記録できるはずのものである。

日本にはかなり昔から日記をつける習慣があつたようだ。平安時代の紫式部日記とか更級日記などの、女流文学者による文学的日記がたいへん有名で、日記といえば文学的日記という誤解は、そのへんからもきているのだろう。ところがもうひとつ、べつなながれが日本の日記の

伝統のなかにはあつた。それは、公家^{くげ}の日記である。三条西実隆の日記とか、山科言国^{やまのこ}、言継^{ことつぐ}の日記などがあるが、いずれも宮廷における所管業務のことをはじめ、さまざまな事件、経験を克明に記した記録である。また、たとえば御湯殿上日記^{おゆどのうゑのにつぎ}というようなものもある。宮廷の台所日記で、天皇の側近の女官が、つぎつぎとかきついできたものである。こういう日記は、具体的な事実の記録であるから、きわめて史料価値がたかい。

わたしたちは、なにも後世のひとのために史料をのこすつもりで日記をつけるのではないが、日記というものは、自分自身にとつて、重要な史料なのである。あとからよみかえてみて、感傷にふけるだけではなく、あのときはどうであつたかと、事実をたしかめるためにみる、という効能が、たいへんおおいのである。そういうことをかんがえると、日本の宮廷貴族の業務日記の伝統をこそ、われわれはうけつぐべきであると、わたしはかんがえている。日記は、自分自身のための、業務報告なのである。

バラ紙にかく日記

山科言継の時代（二六世紀）には、日記帳などは、売っていなかったにちがいない。言継の日記の原本は、大部分が、手紙や和歌をかけた紙を裏がえしにして、それにかかれていますというものである。そして、その「紙背文書」がまたひじょうな史料的価値をもっているというからおもしろい。

義で、実質的で、たいへんけつこうなのだが、社会的蓄積がきかないという大欠点がある。やはり、どうしてこうしてこうなった、ということをも、かきのこしておいてくれないと、あとのもののためにならない。

ヨーロッパには、どの国にも、むかしからアルキーフ(文書館)という施設が発達していて、さまざまな記録を、じつに克明に保存しているということがある。日本では、そのような、記録保存のための公共施設の発達がわるいから、記録がのこっていない、というせいもあるけれど、じつさいは、それ以上に、はじめから保存の対象になるような記録がとつてない、というのが真相だろう。まえの経験を吟味して、そのうえにたつて、あたらしい経験をつぎたしてゆこう、というふうには、なっていないのだ。

進歩とか発展ということをかんがえると、これではあきらかに効率がわるい。膨大な記録カードと日記の蓄積は、いわば個人のためのアルキーフである。わたしがいつているのは、知的生産にたずさわろうとするものは、わかいうちから、自家用文書館の建設を心がけるべきである、ということなのである。

本格的な文書館とか資料館とかによる、社会的な記録蓄積施設とその効果については、将来またべつにのべる機会があるだろうから、ここではのべないでおく。

10 原 稿

他人のた
めに
か
んがえてみなければならぬ順番がまわってきたようである。それは、文章の技術についての話である。それも、発表ということを前提にしての、文章のかきかたの話である。手紙や日記については、すでにのべた。ここにいるのは、特定の個人や自分自身にあてた私的な文章ではなく、原則として、公表されてたくさんのひとによまれることを前提にした、いわば社会的な文章のことである。

そういう文章をかかなければならない機会は、現代においては、だれにでも、なんべんでも、まわってくる。さまざまな仕事の発端から終結まで、その計画、経過、結果について、いつもなんらかの報告が期待されているのである。仕事をした人間は、だれでも、その仕事について、情報を提供する社会的責任を負っているのである。

そのような文章をかくためには、どんな注意が必要であろうか。これも、こまかく論じだせ

ば、きりのないことであろうが、わたしたちの体験から気のついたことを、いくつかのべよう。一般に公表するにせよ、特定の人たちにかぎってみせるにせよ、とにかく、印刷そのほかの方法で複製されることを予想してかかれたかきものは、原稿とよばれる。ここで、文章のことをかんがえるまえに、まず原稿のことを、さきにとりあげてみよう。原稿のかきかたについてである。

訓練の欠如

ある大学で、学生の文芸作品を募集した。わたしの友人のひとりが、その審査員をひきうけた。たくさんあつた応募作品の原稿をよんで、ほんとうにびっくりしたそう。文学的レベルをいどころの話ではないという。はるか文学以前のところで落第というのが、ひじょうにおおかつた。原稿のかきかたの基本ルールさえも知らないというのである。大学生が、だ。これはいつたい、どういうことなのだろう。

わたし自身も、それに似た経験をつたびしている。わかい諸君の論文を原稿でよんで、手をいれる役をひきうけることがおおいが、まったく信じられないくらいおそまつな例がいくつもある。たとえば、行をかえるには、一字さげてかきはじめる、ということさえしなかったりする。

じつは、わかい学生諸君にかぎらないのである。こういうことをあからさまにかくべきではないかもしれないが、先生がただつて、そうとうのものなのだ。わたしは、いくつかの学術雑誌や論文集などの編集をしたことがあるから、そのへんのことがある程度わかっているのだが、りっぱな学者で、ほんとうにおどろくべき原稿をよくすひとがある。やつぱり原稿というもの、記の基本的なルールもなにもわかっていないのだ。行をかえる方法くらいはわかっていても、記号のつかいかた、さし画、図版のいれかた、註のつけかた、引用文献のだしかた、などになると、だいたいはもうデタラメである。編集者なかせというものだ。

学生諸君も、先生がたも、はつきりいつて、訓練不足なのだ。というよりも、訓練の欠如と、いったほうがよいかもしれない。だいたいは、いっぺんもそういう訓練をうけることなしに、原稿用紙にむかっているのである。学校でも、「原稿のかきかた」などという講義はしてくれないし、実習もない。わたし自身も、だれからもそんなものをならった記憶がない。見よう見まねでやっているにすぎないのである。はじめのころは、ずいぶんひどい原稿で、編集者諸氏をなかせていたのにちがいない。

原稿のかきかたなんか、とりたてていうほどむづかしい技術だとおもわないが、まったく練習なしでは、ちゃんとしたものができないのはあたりまえだ。すくなくとも大学では、各学部に通の必修科目として、原稿かきを訓練する機会をもうけるべきであると、わたしはかんが

えている。

いままでに訓練をうける機会がなかったというのなら、せめて、そういうことについてかいた本でもよんで、自分で練習すればよい……。ということに、ふつうならなるところだが、じつは、これも奇妙なことには、そういう本がないのである。気になって、身のまわりの本をあたって見たのだが、「原稿のかきかた」とか「原稿の技術」などというものは、いつこうにかいてない。

「文章のかきかた」なら、どこにでもある。そのための単行本もたくさんあるし、うまい文章の例もいくらでもみつかることができる。しかし、ここで問題にしているのは、文章ではない。どんなりっぱな文章でも、はじめは原稿にかかれるのだ。それをどういうふうに紙のうえにかけば、ちゃんと印刷してくれるのか、その方法や技術については、だれもおしえてくれないのである。「写真のうつしかた」なんかについては、りっぱな本がたくさんあるのに、「原稿のかきかた」の本がないというのは、いったいどうしたことであろうか。

原稿というものは、自己流に、すきなふうにかくわけにはゆかないものなのだ。その点が、自分自身のためのノートや日記とは、たいへんちがうところである。原稿は、自分のためのものではない。それは本質的に他人のためにかくものなのである。

そもそも原稿とはなにか。あたりまえのことだが、原稿というのは、それを印刷物にするためにかくものである。それはいわば、印刷という工事を施工するための設計図だといつてもよい。設計図をみて、じつさいの工事をすすめるのは、原稿をかいた本人ではなくて、他人の印刷屋さんである。その設計図が自己流にかかれていたのでは、なんのことかわからない。それでは工事がうまく進行するはずがないではないか。

そういうことをかんがえると、原稿をかくためには、印刷ないしは本づくりの概略をしっている必要があることがわかる。建築のことをなにもしらないでは、設計図もかけないであろう。じつさいは、原稿のかき手と印刷屋さんとのあいだには、編集者という専門技術者が介在している場合がふつうだから、しろうとの執筆者でも、まあなんとか、かつこうがついているのであろうが、もし執筆者が、印刷ができあがるまでの工程について、ひととおりの知識をもっていたら、編集者も、印刷屋さんも、おおいにたすかることになるにちがいない。

出版・印刷関係者の責任

そこでこんどは、そちらのほうにホコ先がむかうことになるが、出版関係者や印刷業界は、どうしてもつと熱心に、原稿のかきかたについての教育普及活動にのりださないであろうか。でたらめな原稿をうけとってこまるのは、その人たちである。原稿が完全であれば、よろこぶのはその人たちである。原稿執筆から本ができ

んだ。わたしが、タイプライターで原稿がかけられるようにしたい、という理由のひとつは、これである。タイプライターなら、コピーは自動的にできる。けつきよく、最近たいへん発達してきた、各種の複写機にたよるほかはないだろうが、性能のよい複写機はどこにでもあるというわけにゆかないし、費用もかかる。わたしは、いまのところ可能な方法としては、やはり出版社において、この問題を解決するほかはないとおもう。

11 文 章

失文症

つぎは、いよいよ文章をかきおろす段階である。それには、どういう注意が必要か。

すでにのべたように、今日においては、職業的な文筆家でなくても、文章をかかなければならぬ機会はいへんおおい。文章がかけるといことは、いまではすべての知的職業人の基礎的技術のひとつである。いまでも、自分は理科の出身だから、文章はかけないとか、かれは文学部の出身だけあって、さすがに文章がうまいとか、そんなふうなかんがえかたをするひとがあるが、現代においては、いずれもナンセンスである。文章をかく能力に、文科も理科もない。いずれにせよ、ちゃんとした文章がかけないのでは、話にならない。

わたしの尊敬する先輩のひとりに、文章をかくのがなによりのがて、というひとがいる。すぐれた実験科学者で、専門のほうでは、ずいぶん業績のあるひとだが、自分で文章をかくことは、ほとんどしない。しかし、そのひとの話をきいていると、すてきにおもしろいのである。そのくせ、それを文章にしようとすると、にっちもさっちもゆかないのだそうだ。原稿用紙を

まえにしたとたんに、脳髓が凝固してしまったようになって、一字もかけないのだという。こ
とばが口からでてこないようになる失語症という病気があるが、こういうひとは、失文症とで
もいうのであろうか。

また、わたしの友人のひとりに、すばらしいフィールド・ワーカー(野外研究者)
行動家の文
章ざらに
が
いる。いつしよにフィールド(現地)にでて仕事をしていると、その多面的な才

能と、活発な精神活動に、心から魅了されてしまうのだ。ところが、そのチャー
ミングなかが、フィールド・ワークの報告書をかくとなると、どういうわけか、さっぱりさ
えない。さんざん苦勞して、みじかいものをやつとまとめあげるのだが、これが、あのすばら
しいフィールド・ワークの報告書とは信じられないくらい、貧弱なものになってしまっている。
かれのやつた仕事のよいところが、すこしもあらわれていないのである。

世のなかには、こういうひとが意外におおい。文章ざらいで、いつさいかかないか、あるい
は、かいてもロクなものができない。さきに、記録の話のところでも、しるしたように、じつ
によい仕事をしたひとが、あんまりおそまつなものしか、かきのこしていないのに、まったく
おどろかされるのである。わたしは、ずつとまえから、探検や学術調査の仕事に関係してい
たので、その種の実例はたくさんみて、しつてゐる。日本は、今日においては、世界各地におく

りだしている探検隊の数からいうと、まったく、大探検国である。世界じゅう、いたるところ
の未開地や辺境で、日本人が活動しているのである。ところが、行動においては、じつにりつ
ばなことをやりとげておきながら、その報告書はちつとも出版されない、という例がひじよう
におおいのである。こまつたことだが、みんな、かくことがきらいなのである。すぐれた行動
家は、しばしば文章アレルギーにかかるのであろうか。

失文症や文章アレルギーのひとを、どうしたらすくうことができるのか、それはわ
才能より
訓練
たしにもわからない。まるで、ひとごとのようないかたをしているが、じつは、
わたし自身がそういうタイプにちかいのである。どちらかというと、行動的なほう

であるせいか、文章をかくのは、正直のところ不得意である。仕事の性質上、しばしば文章を
かかねばならないことになるのだが、そのつど、たいへんくるしいおもいをする。原稿用紙を
まえにして、おおげさにいえば、七転八倒する。結果的には、ひじょうな遅筆ということにな
つて、編集者にめいわくをかがちである。

ある作家の作品のなかに、只棹埋男たださおめお翁という老学者がでてきて、おどろいたことがある。そ
の老人は、しめきりがきても文章ができあがらないので、たいへんくるしいむのだが、夜中にな
ると、とつぜんにキツネがやってきて、とりつく。すると、たちまちにして文章ができあがる、

というのである。じつさい、くるしまぎれに、キツネつきみたいな状態になって、無我夢中でききあげてしまうことがおおい。なんとかして、平静な精神状態で、ゆうゆうと文章がかけられるようになりたいとおもうのだが、なかなかそういうふうには、筆がはこばない。さらさらと、いくらでも文章がかけるひとをみていると、ほんとうにうらやましいとおもう。

こういうのは、うまれつきの才能ということもあろうが、わたしはやはり、教育と訓練におうところがおおいとおもう。わたしなども、わかいときに、そのような教育と訓練をうけていたら、キツネのたすけをかりなくても、ゆうゆうと文章がかけるようになっていたであろうが、いまからでは、手おくれである。

それでも、くるしみながらも、すこしずつでも文章をかきつづけることができているのは、やはり、友人たちからおそわった、文章のかきかたの技術についての知識と経験のおかげだとおもう。天成の文章家でなくても、一定の技術的訓練によつて、だれでも、いちおうの文章はかけるようになるものと、わたしは信じている。

かんがえを
まとめる

さてそれでは、文章のかきかたについての、技術的訓練の方式をのべよ、ということになると、たいへんこまるのだが、わたしたちの仲間で、文章をかくための技術として開発されたものが、いくつかある。それについて、すこし紹介をしよ

う。

文章をかくという作業は、じつさいには、ふたつの段階からなりたっている。第一は、かんがえをまとめるという段階である。第二は、それをじつさいに文章にかきあらわす、という段階である。一般に、文章のかきかたというと、第二の段階の技術論をかんがえやすいが、じつは、第一の「かんがえをまとめる」ということが、ひじょうにたいせつなのである。かくべき内容がなければ、文章がかけないのは、あたりまえである。文章をかくためには、まず、かくべき内容をかためなければならぬのだ。

わたし自身のことをふりかえってみても、なかなか筆がすまないときというのは、たいていは、かんがえがじゅうぶんにまとまっていないときである。かくべき内容が、しつかりとかたまっていないときである。文章をかくというのは、情報伝達行動である。伝達するにたる情報、頭のなかにできあがっていないければ、そもそも伝達しようという情熱がわいてこないものである。

それでは、どのようにして、かんがえをまとめるか。あるいは、かくべき内容をかためるか。小説家などは、かんがえをまとめるまでもなく、つぎからつぎへとわいてくるイメージを、ずるずるとたぐりだして、それを絵巻物のようにえがいてゆく、という能力を身につけているひ

おわりに

技術の体系化
をめざして

以上、知的生産の技術ということについて、かつてなふうにな、話をすすめてきた。いつかは、もっと体系的な叙述法をもつて、この種の問題をとりあつかえるようになるかもしれない。すでにのべたように、この本でとりあつたのは、個人における知的生産の技術である。当然、集団あるいは社会のレベルにおける知的生産の技術にまで、議論は発展してゆかなければならないはずのものである。しかし、いまは最初のころみとして、これでおゆるしをこう。

わたしがこの本でかこうとしたのは、おおげさにいえば、やはり一種の学問の方法論ということになるかもしれない。ひとつひとつの技術についていえば、まったくバカみたいなことで、だれでも知っているようなことなのだ。ただそれが、全体としてひとつのシステムに組みあがろうとしている。さまざまな技法が、あい連関して、共通のプリンシプルでむすばれているのである。そういう点で、ひとつの方法論とみることもできよう。

このシステムは、ただし、まったくの未完成のシステムである。社会的・文化的条件は、これからまだ、めまぐるしく変わるだろう。それに応じて、知的生産技術のシステムも、おおきくかわるにちがいない。ただ、その場合にも、ここに提示したようなかんがえかたと方法なら、じゅうぶん適応が可能だともうが、どうだろうか。

この本にのべたことは、どれひとつとっても、理屈は、しごくかんたんである。ただし、この種のことは、頭でいくら理解しても、やってみなければまったく無意味である。自分でいろいろ、こころみていただきたい。さまざまな技法を開発できるであろう。そのような情報を交換するために、「知的生産技術」というような専門雑誌が発刊されてもよいくらいに、わたしはかんがえている。

くりかえしいうが、実行がかんじんである。実行しないで、頭で判断して、批判だけしていたのでは、なにごととも進展しない。どの技法も、やってみると、それぞれにかなりの努力が必要なことがわかるだろう。こういう話に、安直な秘けつはない。自分で努力しなければ、うまくゆくものではない。

情報時代のあ
たらしい教育

むかしのひとは、この本にのべたような事項については、ほとんど無頓着であつた。こんなことをかんがえる必要が、あまりなかつたのである。今日、時代

のあたらしい状況に対して、われわれは、自分自身をし、つけてゆかなければならないだろう。

たとえば、むかしのひとは、物をたいせつにする、という点では、きちんとしたしつけを身につけているひとおおい。しかし、情報をたいせつにする、という点では、しばしば、まったくしつけができていない。主人の書齋に風がふきこんで、紙ぎれが部屋いっぱいにならばつたのを、老女中が気をきかせて、かたづけたのはよかつたが、しろい紙はつかえるから、もつたいないとおもつてのこし、字のかいてある紙はすべてすててしまった、というわらい話がある。

情報の管理は、物資の管理とは、原理のちがうところがある。「もつたいない」という原理では、うごかない。さまざまなかたちの、あたらしいしつけが必要だ。たとえば、紙ぎれや印刷物をなくさないこと、書類をおったり、まるめたりしないこと、字をかくのをめんどうがないこと、など、子どものときから訓練しておけば、らくに身につく性質である。

今日までのしつけや教育は、物質の時代にはうまく適合していただであらうが、あたらしい情報
報の時代には、不適当な点がすくなくないのであろう。情報の生産、処理、伝達について、基礎
的な訓練を、小学校・中学校のころから、みっちりとしこんでおくべきである。ノートやカー
ドのつけかた、整理法の理論と実際、事務の処理法など、基本的なことは、ちいさいときから

おしえたほうが、よいのではないか。

さきに、文章の教育は、情報工学の観点からおこなうべきだろうといったが、ここにあげたさまざまな知的生産技術の教育は、おこなわれるとしたら、どういう科目でおこなわれるのであろうか。国語科の範囲ではあるまい。社会科でもなく、もちろん家庭科でもない。わたしは、やがては「情報科」というような科目をつくって、総合的・集中的な教育をほどこすようになるのではないかと考えている。

手帳のつけかたのような話からはじまって、とうとう未来の教育論にまで発展してしまった。独断もおおいこととおもう。こういう話題について、たくさん読者の、活発な討論と研究発表を期待したい。

編集部注

著者は本書を著作集に収める際、文字表記などを一部あらためた。
今回の改版にあたって、その著作集での変更を反映した。

梅棹忠夫

1920-2010 年

京都大学理学部卒業 理学博士
京都大学人文科学研究所教授、国立民族学
博物館長を歴任

専攻—民族学、比較文明学

著書—『モゴール族探検記』

『実戦・世界言語紀行』(以上、岩波新書)

『東南アジア紀行』

『文明の生態史観』

『地球時代の日本人』

『日本とは何か—近代日本文明の形成と発展』

『情報の文明学』

『研究経営論』

『情報管理論』

『梅棹忠夫著作集』(全22巻、別巻1)

『行為と妄想—わたしの履歴書』

『山をたのしむ』

『日本探検』

知的生産の技術

岩波新書(青版)722

1969年7月21日 第1刷発行
2015年6月26日 第94刷改版発行
2025年5月2日 第107刷発行

著者 うめさおただお
梅棹忠夫

発行者 坂本政謙

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
<https://www.iwanami.co.jp/>
新書編集部 03-5210-4054
<https://www.iwanami.co.jp/sin/>

印刷・理想社 カバー・半七印刷 製本・中永製本

©梅棹淳子 1969
ISBN 978-4-00-415093-0 Printed in Japan